
秩父郡長瀞町

中野遺跡

診療所併設型介護老人保健施設関係埋蔵文化財発掘調査報告

2006

医療法人 社 団 医 新 会
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

図版1



遺跡遠景（対岸から東方向を望む）



縄文時代晩期の住居跡

序

長瀬町は埼玉県の西北部、秩父地方の東の入り口に位置し、国の名勝及び天然記念物に指定されている「長瀬」やロウバイの咲く宝登山など、豊かな自然環境に抱かれた、埼玉県を代表する観光地です。年間200万人以上の人々が訪れ、春の桜、ツツジ、夏のキャンプ、川遊び、秋の紅葉、冬のロウバイなどに興じ、四季折々の自然や歴史と文化に親しむことのできる魅力的な町です。

このたび医療法人社団医新会では、カタクリの里として知られる長瀬町岩田に診療所併設型介護老人保健施設を建設することとなりました。事業地内には縄文時代をはじめとする先人の生活跡が多く残されており、これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課と関係諸機関が慎重に協議を進めてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、医療法人社団医新会の委託を受けて、当事業団が実施しました。

今回の発掘調査では、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡や集石土壙などが発見され、縄文土器、打製石斧、石剣、石棒などの遺物が多数出土しました。とくに、事例の少ない縄文時代の土面や遠隔地との交易によってもたらされたヒスイ玉など、当時の人々の暮らしぶりや精神世界を知ることのできる貴重な遺物も見つかっており、この地の歴史に新たな資料を加えることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました医療法人社団医新会、長瀬町教育委員会、並びに地元関係者各位に対しまして、深く感謝申しあげます。

平成17年11月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 福 田 陽 充

縄文人の心をもって、医療と介護の世界を変えたい

医療法人医新会理事長 横山 博美

私ども医療法人医新会は、東京の板橋区大山町と千代田区神田岩本町において、医療施設と介護施設を、26年有余にわたり運営して参りました。このたび理事長である私が長年にわたりあこがれの地であった長瀬町の岩田地区において、介護型老人保健施設 縄文の里 長瀬俱楽部（81床）と有床診療所長瀬医新クリニック（19床）を建設する許可を頂き、また大瀬町長はじめ多くの町役場関係者の皆様、そして、岩田地区の地主の皆様方、地区長さんや住民の皆様方に、ご理解とご協力を賜り、心より御礼を申し上げます。

ところで、建設予定地は遺跡包蔵地ということで、試掘調査しましたところ、縄文時代の土器の破片などが発掘され、本格的な調査を長瀬町教育委員会に依頼し、その結果、縄文中期・縄文後期・縄文晩期の土器や住居跡が発掘され、記録保存することとなりました。通常であれば工期の遅延や発掘作業に関わる費用の捻出など、頭を悩ますところですが、私は大変喜ばしい出来事と心の底から思いました。縄文人は狩猟民族であり、住み心地のよい地を選んで生活をしており、いま見直されているスローフーズ・スローライフの実践者のさきがけであったといわれております。また芸術的センスにもあふれ、人の顔に形作られた土面も出土しました。その縄文人が長く生活したこの土地で、私が生涯、聴診器を握って生活できることは、誠に望外の喜びです。時には竹藪に、あるいは荒川に、時には畑に、山にと豊かな自然と交わり、たまにはゴルフ場へ散歩気分で出かけるというのも大きな楽しみの一つです。夏暑くて、冬寒いというめりはりのある気候、春夏秋冬の四季折々の景色のうつろいを、老人保健施設の入所者の皆様や入院中の患者さんたちにも、是非体験して頂き喜んでもらえると確信しております。

2006年10月1日の開設を目指し、現在、岩田地区の皆様のご協力とご理解のもと、ビルを建てておりますが、今後の私どもの活動は、縄文人の大らかな心意気を基盤としながら、長瀬町の町民の皆様のご指導とご支援を心の栄養とし頑張って参ります。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

例 言

1. 本書は、秩父郡長瀬町に所在する中野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表番地、および発掘届けに対する指示通知は、以下の通りである。

中野遺跡（N K N）
埼玉県秩父郡長瀬町大字岩田582番地他
平成17年6月14日付け教文第3-133号
3. 発掘調査は、診療所併設型介護老人保健施設建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、医療法人社団医新会の委託を受け、財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、中村倉司、村端和樹が担当し、平成17年6月27日～平成17年8月31日まで実施した。
6. 整理・報告書作成は大谷 啓が担当し、平成17年10月3日～11月30日まで実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、（株）シン技術コンサルに委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は中村、村端が、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
9. 出土遺物の整理および図版の作成は、金子直行が主に行い、石器については村端と西井幸雄が行った。
10. 石材のX線回析分析は、大屋が行った。
11. 本書の執筆は金子が行い、I-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、IV-6-(2)を村端が行った。
12. 本書の編集は、大谷が担当した。
13. 本書にかかる資料は、平成18年度4月以降、長瀬町教育委員会が管理・保管する。
14. 本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝を表します。

長瀬町教育委員会 小澤 守

凡 例

1. 本書中におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による平面直角座標第Ⅳ系（原点：北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値（m）を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示している。
2. 遺跡における調査は、前記座標系に基づき10m×10mのグリッドを設定して行った。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として東西方に向西へA～、南北方向南へ1～を付した。
4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。

全体図………1/250
遺構図………1/30・1/60・1/120
- 土器実測図……………1/4
土器拓本図……………1/3
土製品……………1/2
石器……………1/1・1/2・1/3・1/4
5. 遺構の表記記号は、以下のとおりである。

S J 住居跡 S K 土壙
S C 集石土壙 S D 溝跡
P ピット
6. 遺構断面図に表記した水準の数値は、海拔標高で、単位はmである。
7. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000、長瀬町発行の1/2,500を用いた。

目 次

図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	3. 集石土壤	26
1. 調査に至る経過	1	4. 溝跡	26
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	5. ピット跡	26
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	6. グリッド出土遺物	37
II 遺跡の立地と環境	3	(1) 縄文土器	37
III 遺跡の概要	6	(2) 石器	43
IV 発見された遺構と遺物	10	V まとめ	51
1. 住居跡	10	付編 中野遺跡出土の石製小玉の石材分析	60
2. 土壌	21		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3	第19図 ピット跡 (1)	29
第2図 周辺の遺跡	4	第20図 ピット跡 (2)	30
第3図 遺跡周辺の地形図	7	第21図 ピット跡 (3)	31
第4図 調査区全体図	8・9	第22図 ピット跡 (4)	32
第5図 第1号住居跡	11	第23図 ピット跡 (5)	33
第6図 第1号住居跡遺物分布図	12	第24図 ピット跡出土遺物	34
第7図 第1号住居跡出土遺物	13	第25図 グリッド出土土器 (1)	37
第8図 第2号住居跡	15	第26図 グリッド出土土器 (2)	38
第9図 第2号住居跡遺物分布図	16	第27図 グリッド出土土器 (3)	39
第10図 第2号住居跡出土遺物 (1)	17	第28図 グリッド出土土器 (4)	40
第11図 第2号住居跡出土遺物 (2)	18	第29図 グリッド出土石器 (1)	44
第12図 第2号住居跡出土遺物 (3)	19	第30図 グリッド出土石器 (2)	45
第13図 土壇 (1)	21	第31図 グリッド出土石器 (3)	46
第14図 第1号土壇出土遺物	22	第32図 グリッド出土石器 (4)	47
第15図 第2号土壇出土遺物	23	第33図 グリッド出土石器 (5)	48
第16図 土壇 (2)	24	第34図 中期中葉土器群の文様構造	52
第17図 集石土壇	27	第35図 晩期の住居形態 (1)	55
第18図 溝跡	28	第36図 晩期の住居形態 (2)	56

表目次

第1表 第1号住居跡計測表	20	第7表 第1号住居跡出土石器観察表	50
第2表 第2号住居跡計測表	20	第8表 第2号住居跡出土石器観察表	50
第3表 土壇計測表	25	第9表 土壇出土石器観察表	50
第4表 集石土壇計測表	33	第10表 ピット跡出土石器観察表	50
第5表 溝跡計測表	33	第11表 グリッド出土石器観察表	50
第6表 グリッドピット計測表	35・36		

写真図版目次

図版1 遺跡遠景 対岸から上流方向を望む	第10図4 第10図5 第10図3
遺跡遠景 対岸から下流方向を望む	図版9 第14図2 第14図1 第14図8
図版2 調査区全景	第25図2 第25図1 第25図3
住居跡遠景	図版10 第1号住居跡出土土器
図版3 第1号住居跡	第1号住居跡出土石器
第1号住居跡炉跡 石器出土状況	図版11 第2号住居跡出土土器
遺物出土状況 P 9遺物出土状況	第2号住居跡出土石器 (1)
図版4 第2号住居跡	図版12 第2号住居跡出土土器 (2)
第2号住居跡炉跡 注口土器出土状況	第2号住居跡出土石器 (3)
完形土器出土状況 P 2遺物出土状況	図版13 第1号土壤出土遺物
図版5 集石土壤群	第22号土壤出土遺物
第1号集石土壤	図版14 グリッド出土土器 (1)
図版6 第2号集石土壤	グリッド出土土器 (2)
第3号集石土壤	図版15 グリッド出土土器 (3)
図版7 第1号土壤遺物出土状況	グリッド出土石器 (1)
F-5区P 3遺物出土状況	図版16 グリッド出土石器 (2)
図版8 第7図11 第10図1 第10図2	グリッド出土石器 (3)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県教育委員会では、民間開発事業により保存に影響が及ぶ埋蔵文化財を適切に保護するため、市町村教育委員会に対し、専門職員の配置や発掘調査体制の整備などを積極的に指導してきた。

しかしながら、大規模又は突然的な開発事業に係り緊急に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が必要となり、地元市町村教育委員会がこれに即応することが困難な場合については、当該市町村教育委員会からの要請に基づき、県教育委員会として支援を行ってきたところである。

平成16年7月21日、医療法人社団医新会理事長から長瀬町教育委員会教育長あて、長瀬町大字岩田582番地における診療所併設型介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財の試掘調査依頼書が提出された。

町教育委員会では、照会地が中野遺跡の範囲内に位置するため、平成16年9月7日に試掘確認調査を実施し、縄文時代の遺物（土器片、石器等）を検出したため、平成16年9月17日付け長教社第341号で、埋蔵文化財が所在すること、建設工事に先立って記録保存のための発掘調査の実施が必要であることを医療法人社団医新会理事長あて通知した。

町教育委員会と医療法人社団医新会は当該発掘調査の実施についての協議を開始したが、当該事業スケジュールは緊迫しており、町教育委員会としてこれに応えることは困難な見通しであった。

平成17年2月、町教育委員会から発掘調査への支援に関する打診があったため、県教育委員会は、発掘調査の期間及び経費の積算資料を得るために再度の試掘確認調査の実施を指導した。再度の試掘確認

調査は、平成17年3月8日に実施され、縄文時代の石器等の所在が確認された。

平成17年5月16日付け長教社第12号で、町教育委員会教育長から県教育委員会教育長あて「中野遺跡の発掘調査への支援について（依頼）」が提出された。町教育委員会所属の専門職員は一名のみであり、他の事務も兼務しているため、当該発掘調査への即応体制を組むことは困難ということであった。

県教育委員会は要請を受け、医療法人社団医新会及び町教育委員会と協議の結果、発掘調査は財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになった。また、現場の発掘作業は平成17年6月20日から8月31日に実施し、遺物等整理作業及び発掘調査報告書作成作業は平成18年3月31までに完了することになった。これにより、平成17年5月31日付けて、財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長を加えた4者による「医療法人社団医新会診療所併設型介護老人保健施設建設予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定」が締結された。

文化財保護法第93条第1項の規定による発掘届は、平成17年6月1日付けて医療法人社団医新会理事長から提出され、これに対する指示通知は平成17年6月14日付け教生文第3-133号で行った。

文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届は、平成17年6月10日付け財理文第123号で財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、これに対する指示通知は平成17年6月24日付け教生文第2-27号で行った。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

中野遺跡の発掘調査は、平成17年6月27日から平成17年8月31日まで実施した。面積は1,600m²である。

調査に先立つ6月下旬から重機による表土除去作業を行うとともに、並行して調査事務所等の設営を行った。

7月上旬から調査を開始し、補助員による遺構確認作業に着手し、順次、遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、集石土壙3基、土壙1基のほか、時期不詳の溝やピットが多数検出された。

遺構精査の後、遺物出土状況や遺構の写真撮影及び図面作成を行い、遺跡の記録保存に万全を期した。8月中旬には主な遺構の調査を終え、調査区の全景写真を撮影し、その後、炉跡の断ち割りなどをを行い、8月下旬には現地調査を完了した。

その後、安全確保のため重機による調査区の埋め戻しを行い、発掘機材の撤収及び事務所等を撤去して、すべての作業を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（平成17年度）

理事長 福田陽光

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 保永清光

(管理部)

副部長 村田健二

主席 高橋義和

主席 宮井英一

主任 福田昭美

主任 菊池久

主任 海老名健

主任 岩上浩子

(2) 整理・報告書作成作業

中野遺跡の整理事業は、平成17年10月3日から平成17年11月30日まで行った。

10月3日から、出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業および写真や図面整理を開始した。遺構団は図面整理を経て第二原図を作成し、スキャナーで取り込み、コンピューターによるデジタルトレースおよび土層の注記を挿入する等、編集作業を進めた。

遺物は、遺構及びグリッド出土土器の接合・復元・採択を行い、遺構図の作成と同様な作業を経て、版組みを行った。石器は10月中旬から実測に着手し、11月上旬に実測をほぼ終え、トレースを行い、さらにスキャニングを行って版組みを行った。

統いて遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業を行い、合わせて原稿執筆を進め、編集作業に着手した。

11月下旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、入稿した後に、三回の校正作業を経て、平成18年2月に報告書を刊行した。

(調査部)

調査部長 今泉泰之

調査部副部長 坂野和信

主席調査員 鶴持和夫

(調査第二担当)

統括調査員 中村倉司

調査員 村端和樹

主席調査員 金子直行

(資料整理第二担当)

統括調査員 大谷徹

II 遺跡の立地と環境

埼玉県秩父郡長瀬町は県の北西部に当たり、北は児玉郡児玉町及び美里町、南は皆野町、東は大里郡寄居町と接し、秩父盆地への北の入り口部に位置している。町のほぼ中央部を荒川が北流し、両岸に形成された河岸段丘上には、多くの遺跡が残されている。

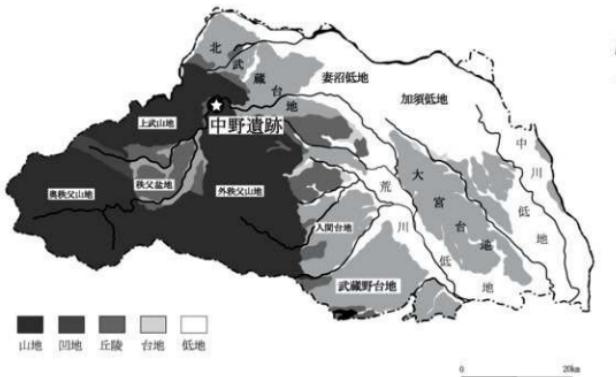
また、河床や河岸に露頭する結晶片岩は、清流や周囲の風景と相まって風光明媚な景勝地を演出している。国の名勝及び天然記念物に指定され、全国に長瀬の名を轟かす「長瀬の石壁」も、結晶片岩が織り成す景勝の一コマである。中野遺跡が存在する長瀬町岩田地区は、遺跡の北を流れる荒川岸に奇岩の露頭が見られ、狹隘なミニゴルジュ帯を形成しておらず、景勝地の一つを構成している。

この秩父盆地を刻み込む荒川は、甲武信岳・雲取山に端を発し、急峻な谷地形を形成しながら東流し、秩父盆地で流路を北に探る。その後、秩父盆地の出口付近の皆野地区でクランク状に屈曲し、長瀬地区

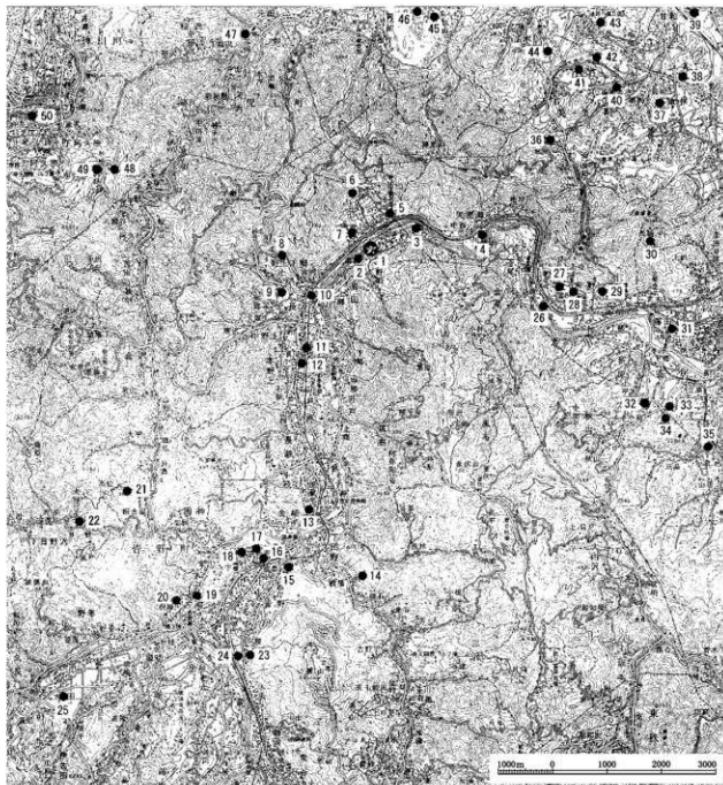
を北上、野上下郷付近で東へと流路を変更し、「はぐれ」てしまうと言うほどの狭隘な波久礼地区を貫け出で、寄居地区で扇状地を形成しつつ、台地部へと流下して行く。その間、大きく三段の河岸段丘を形成し、そこに流れ込む小河川が段丘上に扇状地を作出する等、盆地地形を中心とした変化に富む複雑な自然地形を形成している。

埼玉県の地形は大きく見れば西側の山地部が高く、東側の台地や低地部が低い傾向にある。河川は旧利根川である旧荒川が山地部外縁を南北に貫流し、それらに向けて外秩父山系から東方向へ流れ出す河川が合流し、さらに南流する傾向にある。これ等の小河川の中で北東方向へと流れ出すものもあるが、現荒川は秩父盆地へ流れ込む小河川を斡合し、県内で珍しく北流する流程を持っている。

中野遺跡は、丁度この北流する荒川が東へと方向を変え始める部分の右岸で、標高128m前後を測る河岸段丘上に位置し、背後には山が迫っている。



第1図 埼玉県の地形図



- [長瀬町] 1. 中野遺跡 2. 大滝遺跡 3. 芦田遺跡 4. 川面遺跡 5. 野上下郷石塔婆 6. 青石石材採掘遺跡 7. 寛保洪水水位磨崖標 8. 大日陰遺跡 9. 辻遺跡 10. 宮沢遺跡 11. 野上駅前遺跡 12. 六道遺跡 [岐野町] 13. 金崎古墳群 14. 妙音寺遺跡 15. 上富沢遺跡 16. 小池遺跡 17. 大背戸遺跡 18. 駒形遺跡 19. 一貫目遺跡 20. オリヨウガイド遺跡 21. 勝負沢岩陰 22. 三角穴半洞窟 23. 小池氏館跡 24. 大塚古墳 [伏居市] 25. 太田条里遺跡 [伏居町] 26. 末野原遺跡 27. 城見上遺跡 28. 末野遺跡 29. 花園城跡 30. 馬騎の内廬寺 31. 寄居魔寺 32. 南大塚遺跡 33. 増善寺遺跡 34. 東国寺東遺跡 35. 平倉遺跡 [亥里町] 36. 栗山遺跡 37. 鍛冶屋峯遺跡 38. 普門寺西山遺跡 39. 甘柏山遺跡群 40. 峰遺跡 41. 白石城遺跡 42. 黒羽黒山古墳群 43. 駒衣魔寺 44. 白石古墳群 [児玉町] 45. 南飯盛遺跡 46. 秋山中山遺跡 47. 塔ノ入遺跡 48. 橋ノ入遺跡 [神泉村] 49. 杉ノ嶺遺跡 50. 下阿原平遺跡

第2図 周辺の遺跡

遺跡周辺の荒川左岸には国道140号線と秩父鉄道が、右岸には県道長瀬玉淀自然公園線がそれぞれ河岸に沿って走っている。遺跡周辺の河岸段丘面はやや幅が広く、中央部に県道が走り、遺跡はこの県道より荒川寄りの河岸段丘を少し下った緩斜面上に立地する。

中野遺跡（1）の所在する岩田地区は、長瀬町北部の荒川右岸にあり、その地名が水田にある大きな岩に由来し、平安時代の勅旨牧である岩田牧が置かれていたと考えられている地区で、他に平安時代に遡る白鳥神社や薬師堂、道光寺、満光寺などの歴史的な神社仏閣が存在する地域である。また、対岸の陣見山と不動山の谷間に形成された諸沢の扇状地上の野上下郷地区には、日本一の大ささを誇る国指定の青石塔婆（5）が存在するなど、この周辺は埋蔵されている遺跡を含め、歴史的遺産が多く残されている地域でもある。

遺跡の周辺の河岸段丘上には、段丘面に沿って縄文時代や平安時代の遺物を含む土器群が点々と所在する。中野遺跡の南端の一角には古墳時代後期の埴丘と思われる低い高まりが存在し、本遺跡を含め周辺部では縄文時代中期から後期の遺跡が集中している。その一つである大滝遺跡（2）は本遺跡の南西側に隣接し、平成12年に発掘調査が行われており、縄文時代後期の弧状列石造構や晩期の土壙が検出され、中期から晩期にかけての遺物が出土している。特に、多数の結晶片岩製石棒・石劍の未製品の出土は、本遺跡ともからみ、製作址としての性格を想起させるものである。

やや視界を広げて、秩父北東部地域における縄文時代の遺跡を概観すると、周囲を取り囲む山々の峠道沿いには皆野町三角穴半洞窟（22）、勝負沢岩陰（21）、妙音寺遺跡（14）、長瀬町大日陰遺跡（8）などが所在し、洞穴遺跡を中心とする草創期から早期にかけての遺跡が点在する。これ等の遺跡はその後も使用されることが多く、この地方の沢伝いの峠道が秩父地方を抜け荒川伝いに台地部へと繋がる交通

の要衝であったことを物語っている。

前期では早期末から前期初頭の良好な土器群を出土し、花積下層式期の住居跡を検出した荒川村（旧）下段遺跡が著名であるが、長瀬町宮沢遺跡（10）でも類例の少なかった花積下層式土器が出土している。さらに、皆野町大背戸遺跡（17）や駒形遺跡（18）では黒浜式土器が出土しており、寄居町南大塚遺跡（32）では関山II式から黒浜式にかけての大集落が調査され、有尾式の良好な土器群が出土している。前期後半では児玉・美里地方に遺跡が増え、羽黒山古墳群（42）、白石城遺跡（41）、普門寺西山遺跡（38）等で諸磯a・b式土器が出土している。前期終末は遺跡の少ない時期であるが、吉田町のわらび沢洞窟が著名で、十三音提式期の良好な土器が出土している。早期の洞穴遺跡群が、特にこの時期に再利用されている点が特徴的であり、人々の動きに共通性が見出せよう。

中期は河岸段丘でバックグラウンドが狭いという地形的な制約があるためであろうか、大きな集落遺跡は少ない。荒川の屈曲部分に形成された比較的面積の広い河岸段丘上では、中期の環状集落が形成されていたようであり、長瀬町宮沢遺跡（10）もその一つである。中期中葉から後葉にかけての遺跡で、住居跡や集石土壙が検出されるなど、中野遺跡と共に通する部分が多い。中期の後半期では、徐々に小さな遺跡が増え、長瀬町野上駅前遺跡（11）や六道遺跡（12）、川面遺跡（4）、寄居町増善寺遺跡（33）等が存在する。

後・晩期では、また遺跡数が減少するが、皆野町大背戸遺跡（17）、駒形遺跡（18）で中期後葉から後期中葉の中敷石住居跡や配石土壙などが検出され、県内に類例の少ない資料を提供している。晩期では、さらに遺跡が減少するが、小鹿野町合角ダム関連遺跡群の調査で、中野遺跡と同様な晩期の住居跡が検出され、注目されている。中野遺跡も貴重な追加資料を提供しており、秩父地方における該期研究のさらなる進展が望まれるところである。

III 遺跡の概要

中野遺跡は、秩父郡長瀬町大字岩田582番地他に所在する。遺跡は秩父鉄道植口駅の南約400mにあたり、標高182m前後を測る駅から対岸の荒川右岸の河岸段丘上に位置する。

遺跡周辺は荒川が北東方向へ流れ、荒川によって形成された幅300m前後を測る河岸段丘が、右岸にそって存在する。この河岸段丘面のやや山側寄りに長瀬玉淀自然公園線が走り、遺跡は県道より北側で、段丘面のほぼ中央部に位置している。この段丘面は荒川方向に緩く傾斜しており、遺跡内で3m前後、調査区内でも1m前後の傾斜を持ち、荒川の河床からは約25mの比高差を測る。発掘調査は建物の敷地部分について行われたが、建物が段丘面に並行して建設されることから、調査区内での比高差は比較的少なかった。

調査は7月から8月にかけて行われたが、礫層面を伝う湧水が多く、調査区の一番低い場所では常に水が溜まっている状態であった。

遺跡内の基本層序は、I層が耕作土、II層が末土、III層が黒褐色土、IV層が黒色土、V層が黄褐色土で、VI層は下層に向かって砂質となり、礫層へと移行する。IV層が縄文時代中期以降の、V層が縄文時代早期末から前期初頭の遺物を混入する。遺跡内は段状に畑が整地されており、調査区より南側の高い部分では後期を中心とした遺物包含層が薄く残存していたが、調査区内は遺物包含層一部が殆ど削平されていた。

検出された遺構は、縄文時代晩期の住居跡2軒、中期の集石土壙3基、縄文時代の土壙2基、時期不詳の土壙20基、溝2本、ピット多数であった。

住居跡は調査区南側の際で2軒が検出されたが、辛うじて遺構確認時にそのプランが確認された。しかし、実際にはほぼ床面に近い状態で検出されており、明確なプランは確認されなかった。さらに、ピットの覆土と地山との区別が難しく、柱穴等も不揃

いであった。住居跡にはそれぞれ壁際に同時期の土壤状のピットが存在し、当初住居内土壤として調査が進められたが、柱穴の可能性があるため、いわゆる住居跡のピットとして処理した。これ等が土壤である可能性も十分あり、その可能性を否定するものでもない。

住居跡の付属施設として、石組垣が存在する。2軒とも同様な形態の垣で、拳大の縦長の縦を垣の縦に円形に並べるものである。2軒の住居跡は楕円形のプランで、中央部に円形の石組垣を持ち、4m程離れていることから、ほぼ同時存在していた可能性が高い。また、E-4区では多数のピットが検出され、一定のまとまりを把握できなかったが、後期の加曾利B式土器が出土していることから、この時期の住居跡が存在していた可能性がある。また、調査区東側部分でピットの集中する地区があるが、その配列に規則性は無く、遺物も出土していない点で住居跡の存在を推定することは難しいと思われる。

土壙で時期が明確なものは、縄文時代早期の条痕文期1基と、中期の勝坂式期が1基である。早期の土壙は、早期終末と思われる条痕文土器と石器が出土している。遺跡全体からは前期初頭の花積下層式土器も出土しているが、土壤内からは縄文を施する破片が1点も存在せず、早期終末と把握された。中期の土壙はほぼ完形土器が正位の状態で出土し、住居の垣土器かと思われたが、さらに周囲から完形土器を含む遺物が出土したため、土壙と判断された。土壤からは土面の破片も出土しているが、鼻、目などの形状の類例が中期に無く、後・晩期のものに近いことから、後・晩期のものが中期の土壙とともに調査されたものと判断された。

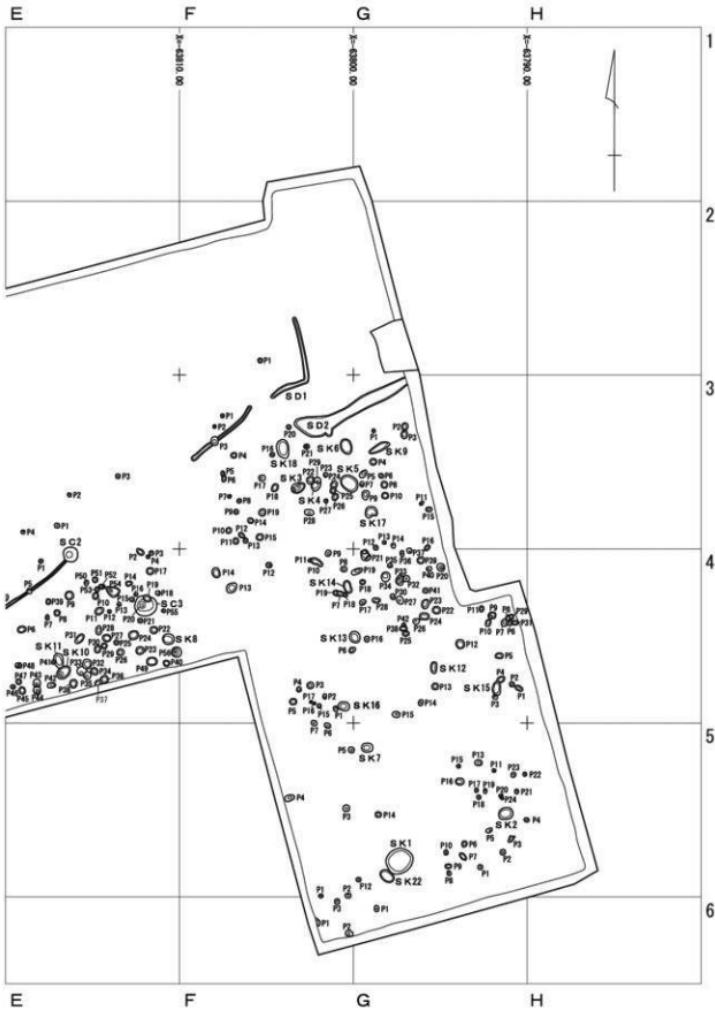
他の遺物として、絆泥片岩製の石棒・石剣の未製品が多く出土しており、隣接する大滝遺跡と関連した石棒・石剣の製作場の可能性があるものと考えられる。



第3図 遺跡周辺の地形図



第4図 調査区全体図



IV 発見された遺構と遺物

1 住居跡

検出された住居跡は2軒であったが、ピットの配置から住居跡と推定されるものがあり、実際の住居跡軒数はさらに増えるものと思われる。しかし、ここでは確実な住居跡のみを取り扱った。

第1号住居跡（第5図～第7図）

C～D-4～5区に位置するが、大半がD-4～5区に位置する。住居跡の床面直上程で検出された住居跡で、調査区南西部の南側壁に接して検出された。試掘段階で、住居跡の石組炉が検出されていたものである。

住居跡はほぼ円形に近い南北にやや細長い楕円形を呈し、長径3.85m、短径3.54m、深さ0.11mを測る。主軸は北より若干北西方向に傾く。住居跡の覆土は地山よりやや黒味を帯びた黒褐色土であり、粘土質で、砂粒も多く含むものである。調査開始前は時期的に方形のプランを想定していたが、覆土の範囲から楕円形と認定された。

炉は石組炉で、長軸上位のほぼ中央部に設置され、長軸方向に細長い楕円形を呈し、長径0.64m、短径0.55mを測る。炉は拳大の細長い自然礫を、立てながら密に並べて楕円形に縁取っているものである。使用されていた礫は、21個であり、石器等の転用は見られなかった。炉を中心として、約1.5mの範囲の床面に、やや硬化面が確認された。

壁溝は検出されなかった。柱穴は住居跡のプランに沿って壁柱穴が廻るものと思われるが、東壁周辺では確認できなかった。住居跡の南壁付近には、規模の大きなピットが3基検出され、当初住居跡と重複する土壤として調査を進めたが、柱穴の可能性も残るために、住居内ピットとして処理した。従って、住居に主柱穴を確定するには至らなかった。

P1～P6は比較的小さなピットで、深さがP1=0.3m、P2=0.13m、P3=0.12m、P4=0.07m、P5=0.15m、P6=0.21mを測る。P7はP8と重複し、

さらに別のピットと重複する可能性もあるが、長径1.04m、短径0.75m、深さ0.64mを測り、土壤状を呈する。P8は長径0.53m、短径0.46m、深さ0.16mを測る。

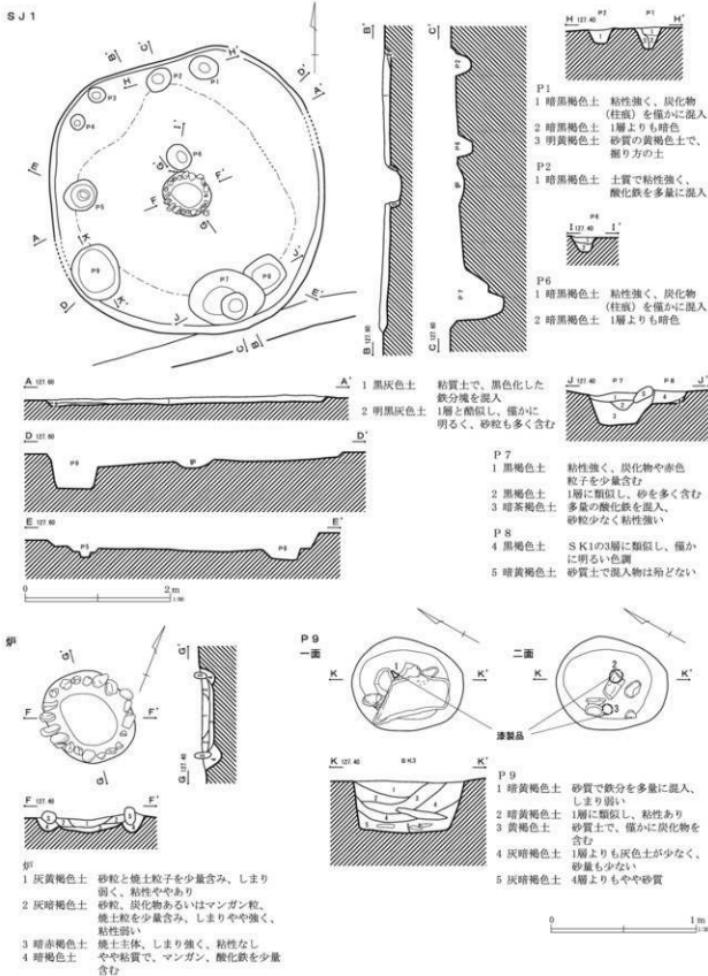
P9は0.76m、短径0.63m、深さ0.36mを測る。覆土の下層から底部付近にかけて、緑泥片岩の板石に覆われるように漆製木製品と石器が出土している。漆製木製品は3点確認されたが、漆膜のみ現存していたため、取り上げることが不可能であった。本ピットは住居跡の柱穴であるのか、付属ピット、または重複する土壤であるのか確定できなかった。

さらに、P1及びP5の開口部からも、緑泥片岩の板石が蓋状に検出されている。これ等のピットが住居の柱穴ではなく別の遺構である可能性もあるが、住居の柱穴であるとした場合、住居廃棄後の祭祀的な行為の結果と認識することも可能であり、興味深い現象である。

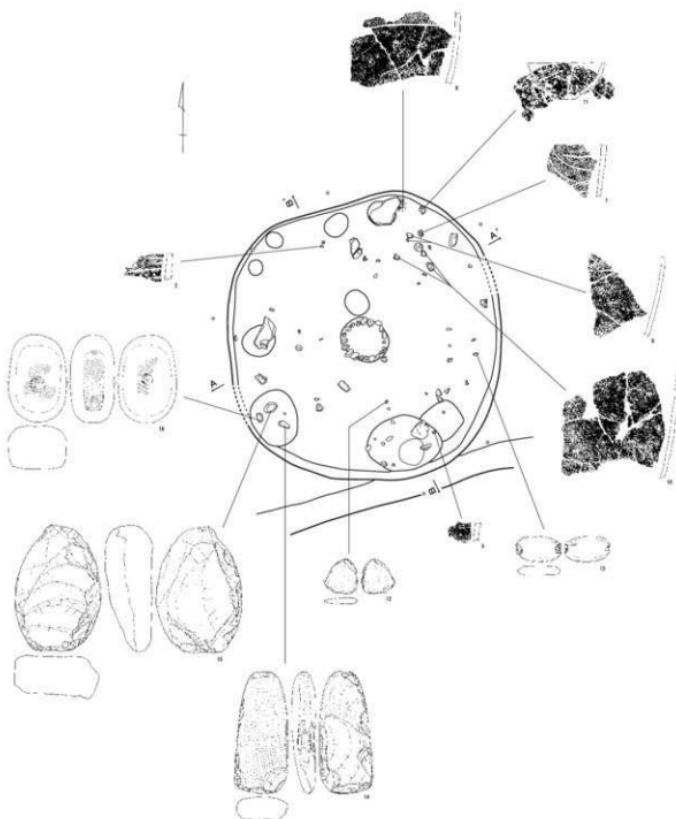
第7図1～11は覆土の床面近くから出土した土器群で、5のP7から出土している。

1～5は後期前葉から中葉の堀之内II式～加曾利B式に比定される土器群で、住居跡の覆土に流れ込んだものと思われる。1は口縁の開く深鉢形土器の口縁部破片で、口縁内面に1条の沈線を廻らせ、口縁部に刻みを施す隆帶を1条めぐらす。脇部は磨消繩文でモチーフを描くもので、単純な構成を探るものと思われる。2は器面の風化が著しく不明瞭であるが、押圧を施す低隆帶と横位の沈線を施文している。3は表に3本、内面に1本の沈線を施文する深鉢である。4、5は横位の細い隆起線と横位沈線を施文する深鉢である。1、4、5は堀之内II式、2、3は加曾利B式に比定されよう。

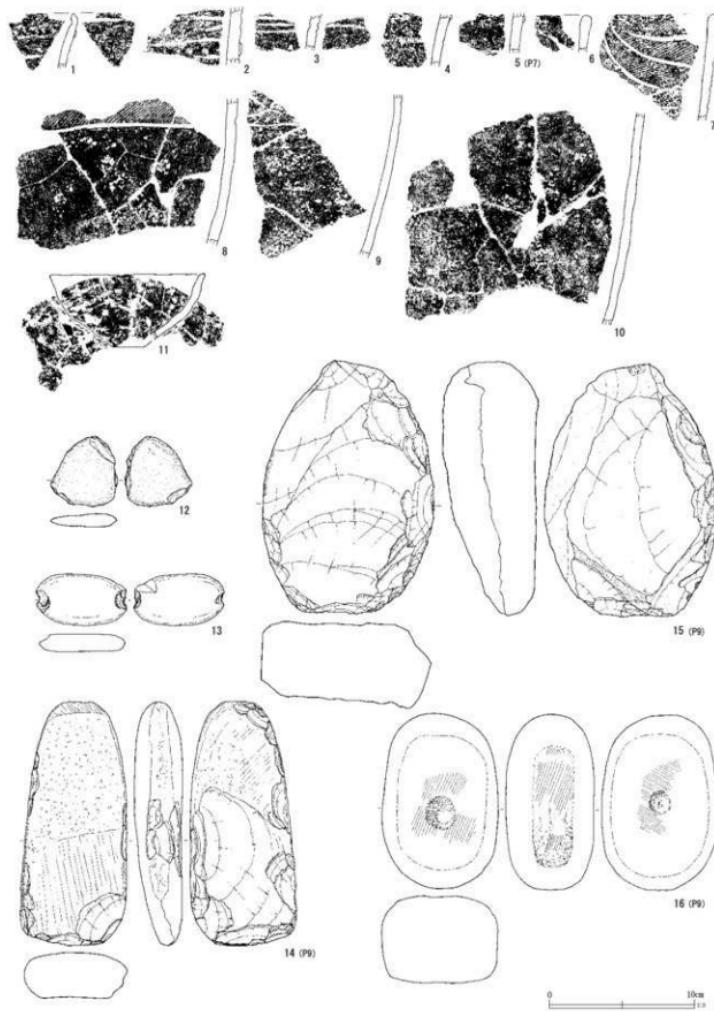
6は若干する丸頭状に肥厚する口縁部が立つ器形の深鉢で、口縁部に三叉文を施文する。地文には細かな单節L R繩文を施文する。7は角頭状の口縁部



第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡遺物分布図



第7図 第1号住居跡出土遺物

が若干内湾しながら開く器形で、地文に細かな単節L R縁文を施文し、弧状沈線を施文する。弧状沈線は三叉文を構成するものと思われる。8~10は胴部破片で、文様帶下端を沈線区画し、細縁文単節L Rを施文するものである。11は小型の無文浅鉢で、口縁が不規則に波打ち、器面整形が粗い等、粗製の浅鉢である。口径11.8cm、現存高4.6cmを測る。

以上は住居跡に伴う土器群で、晩期の安行Ⅲ a ~Ⅲ b式にかけての時期に比定される。

石器は12、13が住居跡覆土から、14~16がP9から出土している。12は搔器で、刃部に片側からの調整剥離を施す。長さ4.8cm、幅4.55cm、厚さ0.9cm、重さ30.4gを測る。13は石錘で、横長扁平な自然礫を使用し、長軸上に剥離によるスリットを施す。長さ6.15cm、幅3.55cm、厚さ1.1cm、重さ39gを測る。

14~16はいずれも泥緑片岩の板石の下部から出土している。14は磨製石斧で刃部を再生しているのか、未製品である。長さ16.7cm、幅7.35cm、厚さ3.3cm、重さ694.8gを測る。15は磨製石斧の未製品と思われ、まだ粗割り段階のもので、礫表を剥ぎ取りながら成形を行っているものである。長さ17.5cm、幅11.8cm、厚さ6.55cm、重さ1186.9gを測る。16は両面に窪み穴を持つ完形の磨石で、長さ12cm、幅8cm、厚さ6.05cm、重さ955.5gを測る。

第2号住居跡（第8図~第12図）

D~F区に位置する。床面直上程で検出された住居跡で、住居跡西侧半分の壁が削平されている。第1号住居跡の北東約4mに位置し、形状、規模、主軸方向も類似している。

住居跡は円形に近い南北にやや細長い楕円形を呈するものと思われ、長径4.33m、推定短径4.2m、深さ0.13mを測る。主軸は北より若干北西方に向く。住居跡の覆土は第1号住居跡よりやや黄色を帯びた暗茶褐色土であり、粘土質で、炭化物を少量含むものである。

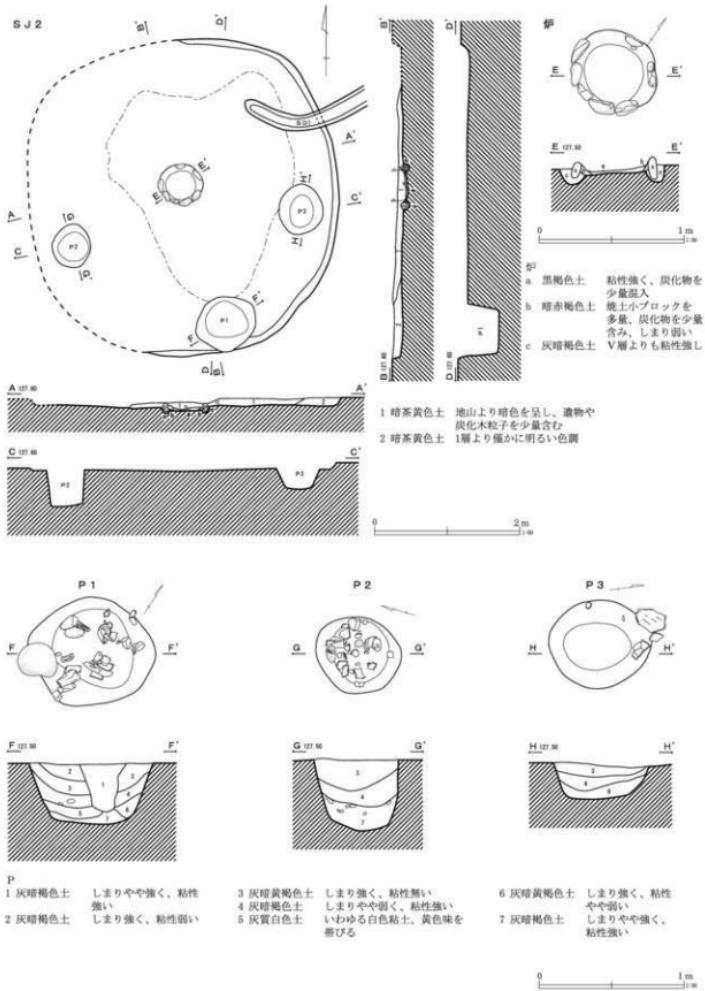
炉は石組炉で、長軸上のほぼ中央部に設置され、ほぼ円形を呈し、長径0.6m、短径0.55mを測る。炉は拳大より大きな長梢円礫を、立てながら円形に並べるものであるが、部分的に欠落している。現存する礫は7個であり、石器等の転用は認められなかった。炉を中心として、約2mの範囲で硬化面が確認された。

壁溝は、第1号住居跡同様に検出されなかった。ピットが3基、住居跡の南側半分に沿って存在するが、北側半分では確認できなかった。これ等3基のピットは規模が大きく、当初土壤と思われたが、P1に柱痕が確認されたことから、住居跡の柱穴と認定された。しかし、精査をしたが北壁際に存在するはずの4番目のピットを検出することができなかった。

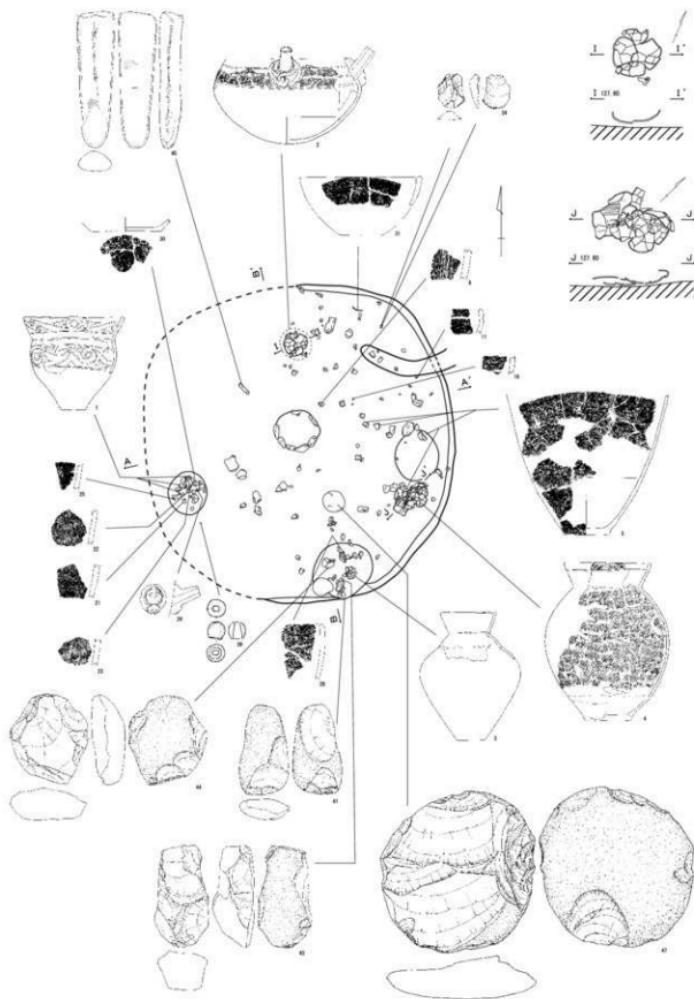
P1は長径0.87m、短径0.75m、深さ0.45mを測る。下層部に比較的遺物が多く出土し、柱痕が観察された。P2は長径0.58m、短径0.53m、深さ0.49mを測り、P1同様下層から遺物が出土している。P3は長径0.69m、短径0.6m、深さ0.26mを測る。

遺物の出土状況を第9図に示したが、大きく住居跡の床面出土と、ピット出土に分かれる。P1からは3、8、12、14、17、19、20、26~28、35、38、41~44、46が、P2からは1、7、10、15、18、21~23、25、29、33、36、37、が出土しており、他は床面付近の出土である。

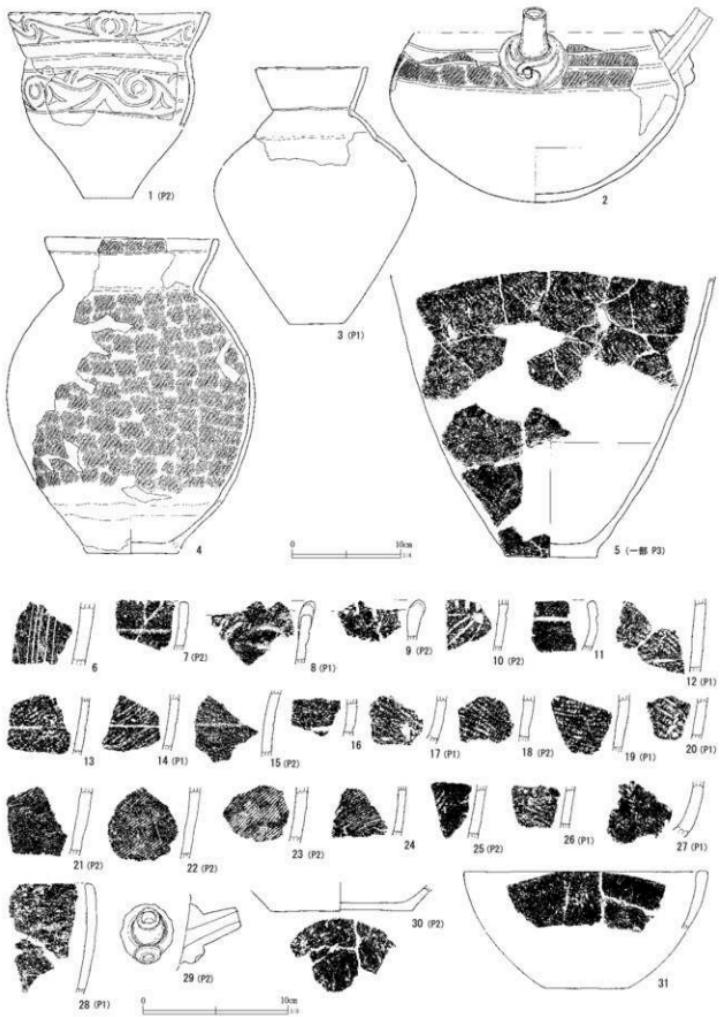
1は口縁部の四分の一程が残る、頸部の括れる鉢状の深鉢である。口縁部と胴部に文様帶を持ち、頸部は1本の沈線で区画する。口縁部文様帶は四単位の双頭小波状突起を中心に、左右対称の沈線三叉文を施文するものと思われる。小突起下は沈線の二重対弧文で玉抱きの円形モチーフ部分を描き、連結する左右対称形の入組状三叉文の足で玉を抱く構成を探る。胴部文様帶は口縁部と同様な玉抱き三叉文と連続する入組状三叉文を、対称的ではなく、連続手系に繰り返すモチーフ構成を探るものと思われる。その際、モチーフの一部には変形を来たしているも



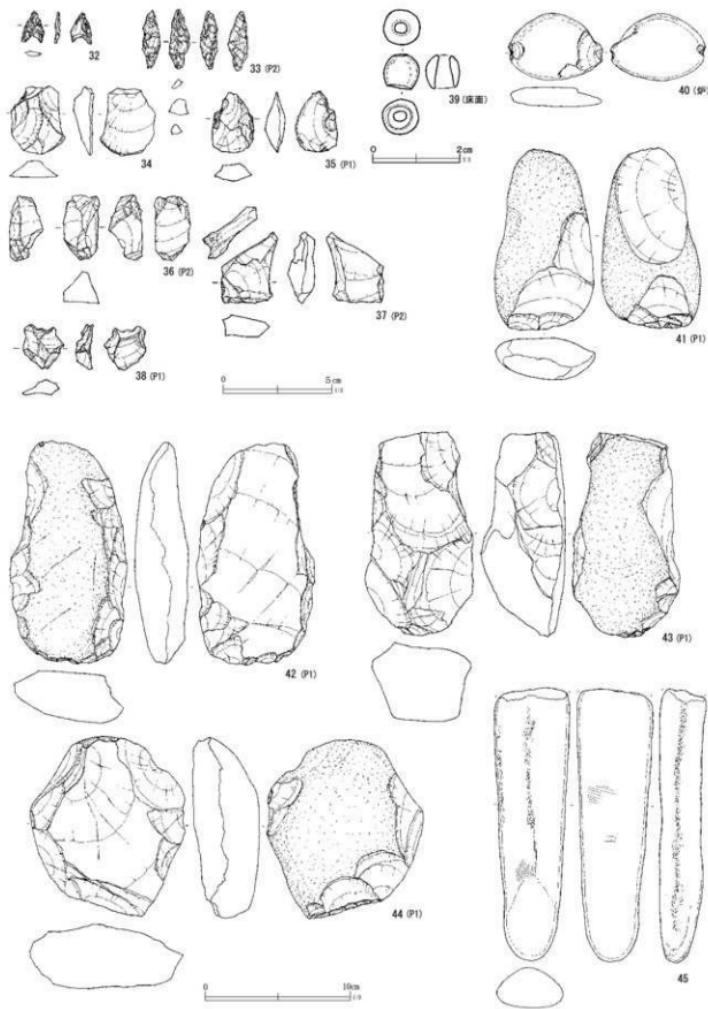
第8図 第2号住居跡



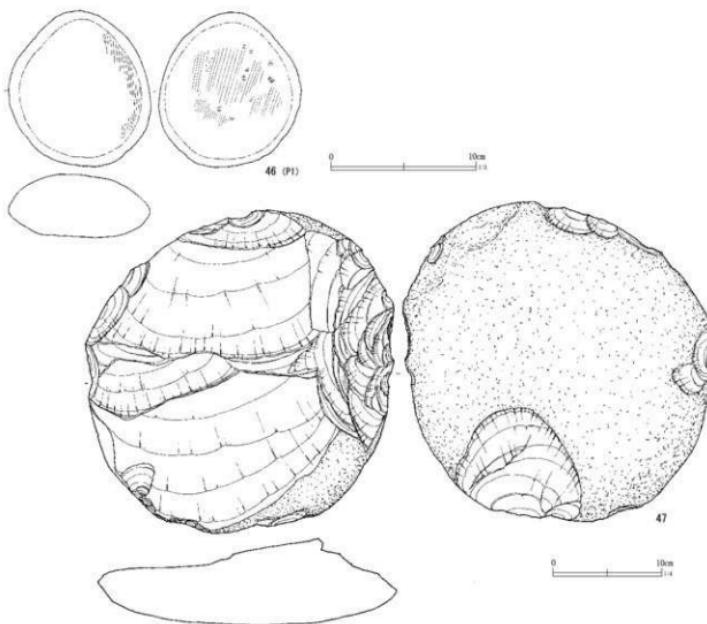
第9図 第2号住居跡遺物分布図



第10図 第2号住居跡出土遺物（1）



第11図 第2号住居跡出土遺物（2）



第12図 第2号住居跡出土遺物（3）

のと思われる。推定口径18.4cm、現存高10.4cmを測る。

2は大型の丸底を呈する注口上器で、口縁部を欠損するかほぼ完形である。胴部強く内湾し、最大径より上位に注口部が付く。器面の荒れが著しく、文様等不明瞭な部分があるが、胴部は3本の沈線を横位に施し、地文に単節L.R繩文を施文する。注口の付け根部は一段高くなり、注口の真下には玉を抱きながら小さく入り組む三叉文を施文している。最大径27.2cm、現存高16cmを測る。

3は頸部が括れ、胴部が2段に括れながら張る無文の瓢形を呈する注口上器と思われるが、推定の域を

出ない。頸部に沈線状の削り込みが見られるが、体部に文様を描かないものと思われる。器壁が薄く、器面には磨きを施しているものと思われるが、荒れが著しく、内面には至当の整形痕が残される。口径9.2cm、現存高8.8cmを測る。

4は頸部が強く括れ、胴部が大きく膨らむ壺形で、口縁部が一部現存、底部を欠損、胴部の約半分が現存する。若干内湾気味に開く口縁部に沈線を廻らして区画し、細かな単節L.R繩文を施文する。胴部との境に明瞭な区画はなく、胴部下端も区画がない。地文は、口縁部と同じ細かな単節L.Rの横位施文である。推定口径16cm、最大径22.8cm、現存高29cmを

測る。

5は4と折り重なって床面から出土したもので、上半部を欠損するが、下半部はほぼ現存する。器面が荒れていて不明瞭であるが、単節RLとLRの結束羽状縞文を施しているものと思われる。底径8.5cm、現存高26cm、最大径約30cmを測る。

6は縦位の多条の沈線が垂下し、後期前葉の堀之内式に比定されるものと思われる破片である。

7は角頭状を呈する口縁部が緩く内湾しながら立つ器形で、口縁部に横位沈線を施して区画し、胴部にRL縞文を施す。8は双頭の小波状突起を持ち、突起下に沈線の横椭円形のモチーフを描く。椭円文は二重の沈線で施す。椭円文の外側には、三叉文を施しておらず、地文に単節LRを施す。9は肥厚する口縁部がやや外反する器形を呈し、口縁部上に突起を貼付する。突起上には、口縁部と直交方向に口唇部を巻き込んだ刻み状の沈線を施す。11は口縁部が内湾気味に立ち、横位沈線で口縁部を区画し、細かな単節LR縞文を施す。4の口縁部手法と類似する。

29は注口土器の注口部破片であり、注口下に盲孔を持つ円形網目文を施している。

10は縦位の角頭状短沈線列で胴部を区画し、印刻状の刺突文を基点として、三本沈線文の木の葉文を施す。滋賀里式の木の葉文に類似する。

12~16は沈線の横位区画に、12はRL、他はLR縞文を施すものである。18~26は縞文のみ施すもので、18~20、26がRL、21~25はLR縞文である。27、30は無文土器の底部付近の破片、28、31は内湾して開く無文土器の口縁部破片である。

以上、土器群は晩期の安行III a式終末からIII b式にかけての時期に比定される。

石器は、大半がピットからの出土である。

32は小型の凹基石鎌で、完形であり、長さ1.5cm、幅1.05cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gを測る。

33は完形の瑪瑙製石錐で、長さ2.2cm、幅0.95cm、厚さ0.85cm、重さ1.8gを測る。

39は床面から出土した青翠製の玉で、一方向から開けられたロート状の穿孔がある。長さ0.8cm、幅0.8cm、厚さ0.75cm、重さ0.6gを測る。

34~38は薄片で、35はチャート製の石錐未製品と思われ、34は貝岩、36はチャート、37は赤色チャート、38は黒曜石である。

40は炉出土の砂岩製の石鍤であり、長さ4.6cm、幅6.5cm、厚さ1.5cm、重さ45.1gを測る。41、42は打製石斧で、41は長さ12.4cm、幅6.85cm、厚さ2.95cm、重さ258.4gを測る。42は磨製石斧の未製品の可能性もある。長さ15.3cm、幅8.1cm、厚さ3.7cm、重さ518.4gを測る。43、44は砾器であるが、石核と思われる。43は42と同様に、磨製石斧の未製品の可能性もある。43は長さ14.05cm、幅7.45cm、厚さ5.8cm、重さ843.5gを測る。44は長さ12.3cm、幅10.7cm、厚さ4.65cm、重さ733gを測る。

45は石棒の基部と思われ、長さ18.65cm、幅5.15cm、厚さ3.2cm、重さ495.6gを測る。46は磨石で、長さ10.75cm、幅9.75cm、厚さ4.5cm、重さ658.2gを測る。47は扁平な円盤で、大型剥片を採る石核である。長さ29cm、幅27.2cm、厚さ6.2cm、重さ7953gを測る。

第1表 第1号住居跡計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
S J 1	C-4-5	3.85	3.54	0.21
	D-4-5			
η [†]	D-4	0.64	0.55	0.11
P 1	D-4	0.38	0.31	0.30
P 2	D-4	0.36	0.25	0.13
P 3	C-D-4	0.24	0.20	0.12
P 4	C-4	0.23	0.20	0.07
P 5	C-4	0.45	0.43	0.15
P 6	D-4	0.36	0.31	0.21
P 7	D-5	1.04	0.75	0.64
P 8	D-5	0.53	0.46	0.16
P 9	C-D-5	0.76	0.63	0.36

第2表 第2号住居跡計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
S J 2	D-4	4.33		0.13
	D-4	0.60	0.55	0.06
P 1	D-4	0.87	0.75	0.45
P 2	D-4	0.58	0.53	0.49
P 3	D-4	0.69	0.60	0.26

2 土壙

土壙は調査区全体で22基検出されたが、時期の判明するものは2基だけで、残りの大半は時期不詳である。ピットと認定した中にも、比較的大きなものは土壙になる可能性もある。ここでは、構築時期の見明瞭な2基について、遺物とともに説明を加え、他については計測表で説明に代えたい。

第1号土壙（第13図、第14図）

G-5区に位置する。プランはほぼ円形を呈し、長径1.56m、短径1.37m、深さ0.27mを測る。

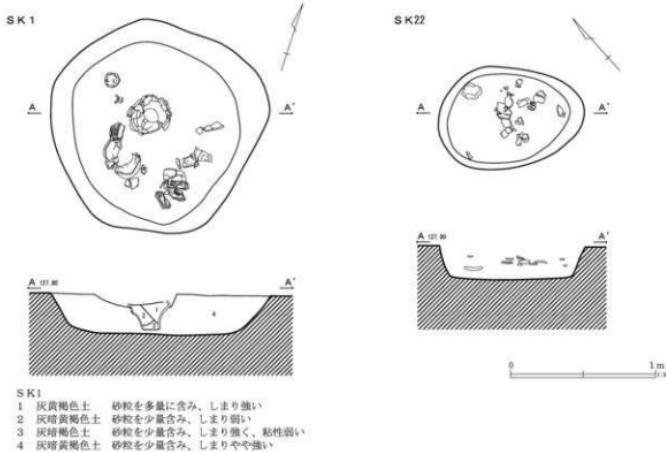
第1号土壙はL字状を呈する調査区の、最も南側の調査区に位置している。覆土が地山と極めて類似する灰暗黃褐色土で、プランの境目が明瞭に把握できなかった。また、第14図1が正位の状態で検出されたことから、当初は住居跡の可能性も考えられた。しかし、周辺のさらに下部からも大形破片が出土したことから、土壙と認識された。土器群は器形の復元できるものが2個体出土しており、その出土状態

が通常ではないことから、墓壙もしくは祭祀的な状況が推測される。

さらに、第14図2の上面が出土して注目されたが、埋設されていた土器と、土面の時期が一致しないことから、周辺の他の時期の遺物と共に調査した可能性が高い。

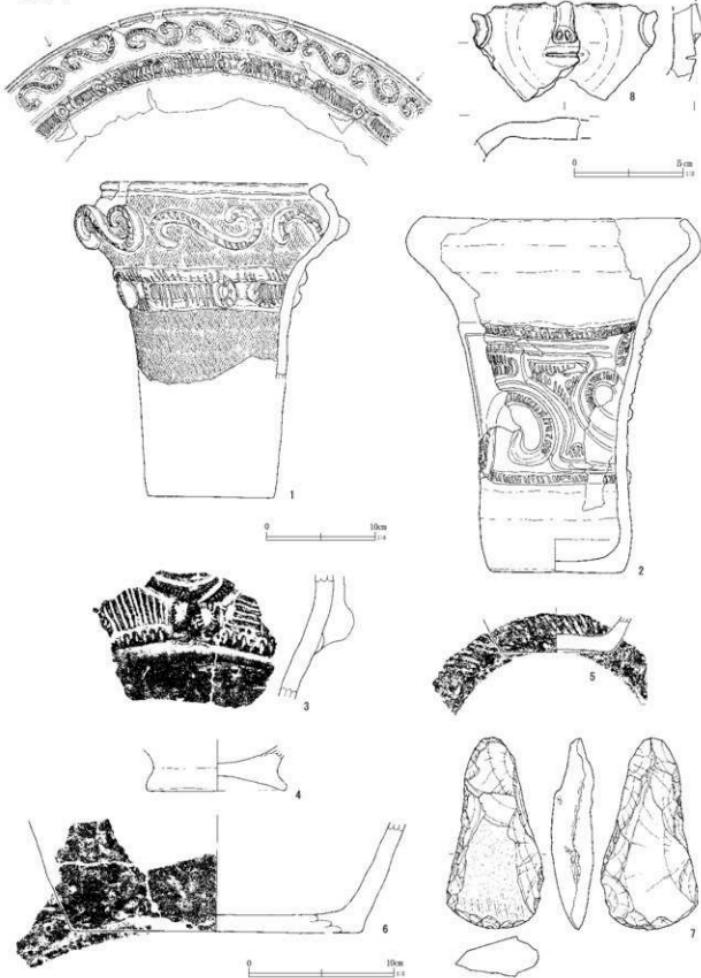
遺物は器形の復元できる土器が2個体、他に大形破片、打製石斧が1点出土した。

第14図1は土壙中央部に正位に埋設されていた土器で、底部を欠損するがほぼ完形土器である。1は口縁部が短い球形状を呈し、筒型状の円筒形の胴部が付く。口唇部は肥厚して、短く外反し、球形状の中央部付近に、刻みを施した横「S」字状の独立した隆文を、6単位に施文する。胴部との境の頸部は2本隆帶で区画し、隆帶間に短隆帶や渦巻き状隆帶を貼付して楕円区画文を区画する。これ等の隆帶上には刻みを施し、楕円区画内には縦位の集合沈線を施文する。この楕円区画文は5単位に展開された

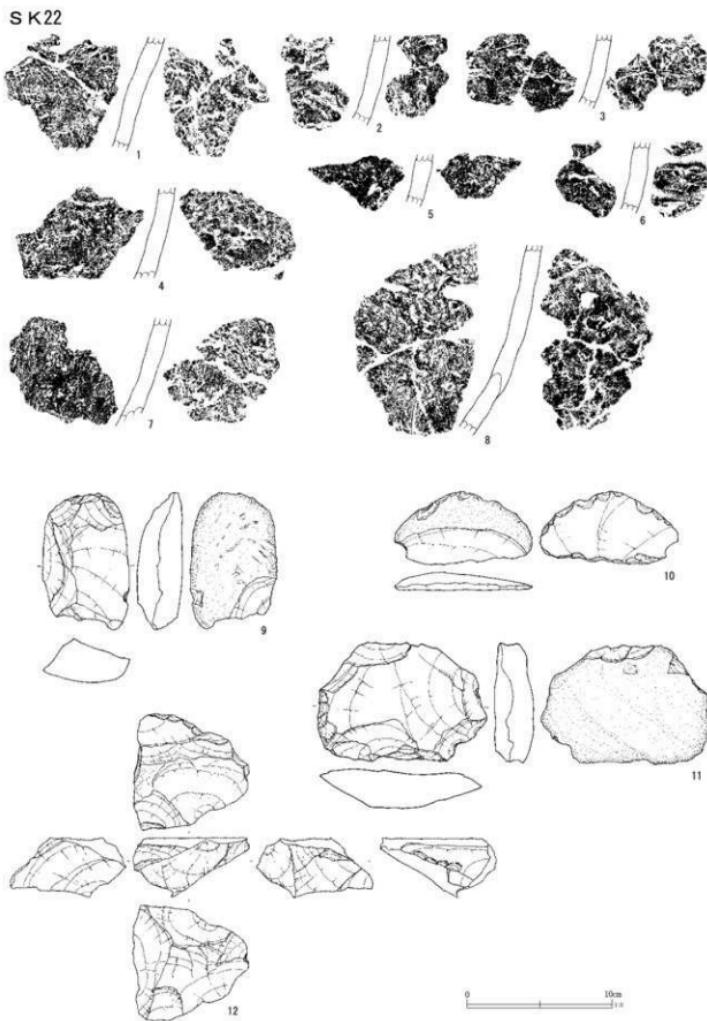


第13図 土壙 (1)

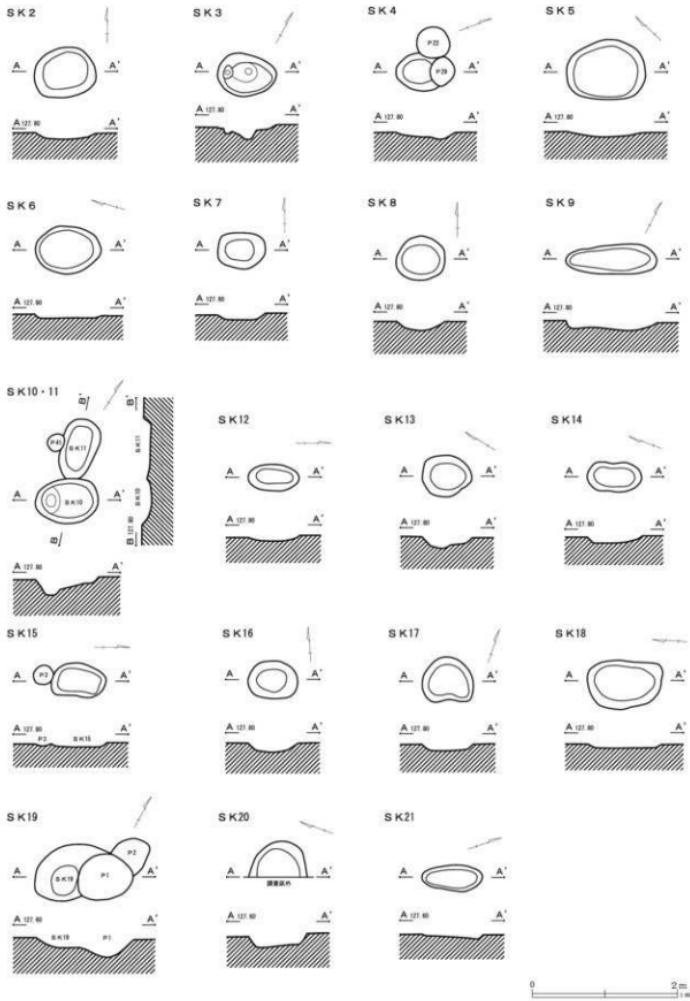
SK 1



第14图 第1号土壤出土遗物



第15図 第22号土壤出土遺物



第16図 土壌 (2)

おり、口縁部の6単位のS字状文とは一致させていない。口径20.5cm、現存高18cmを測る。口縁部と胴部には単節R L繩文を施文している。口縁部のS字状文と器形は東北南部の大木8a式的な要素が窺えるが、頸部の楕円区画は勝坂式であり、楕円区画の一端を渦巻き状に加工するのは中峠式の特徴である。従って、この土器は、中期中葉最終末の段階で、大木8a式を母体として、勝坂式と折衷した様相を持つ土器と評価される。

2は内湾する無文の口縁部が開く器形を呈し、胴部に隆帯の渦巻文を主体とした区画文を施文するものである。隆帯上には刻みを施し、隆帯脇は2本沈線を沿わせ、部分的には蓮華状文を施文する。胴部破片の残りが少なく、モチーフ構成は不明である。胴部が細く、口縁部が開く器形は、1にも共通する。推定口径24cm、器高32.5cm、底径12.5cmを測る。勝坂式終末期に位置付けられる。

3は口縁部から頸部にかけての破片で、刻みを施す頸部区画隆帶に眼鏡状突起が付き、渦巻状文を描く隆帶と連結する。区画内には集合沈線を施文する。

5は単節R Lを施す底部破片で、底径7.8cmを測る。4は上げ底の底部で、台付きになる可能性がある。6は無文土器の底部で、底径20cmを測る大きな土器である。

8は上面の顔半分が残存しており、目、口に沈線状の切り込みが施され、鼻は筋が通っている。耳は耳飾りを表現しているものと思われる。中期の上面にこの様な顔表現が見られないことから、後・晚期

の所産と思われる。

7は完形の打製石斧で、長さ13.1cm、幅6.65cm、厚さ2.9cm、重さ233.1gを測る。

第22号土壙（第13図、第15図）

G-5区に位置する。第1号土壙に隣接して存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.7m、深さ0.24mを測る。

遺物は早期末の条痕文系土器と、石器が出土している。

第15図1～8は器壁に纖維を多く含み、脆弱な土器で、内外面に浅く条痕文を施し、条痕文系土器群終末期の様相を持つものである。本遺跡のグリッドからは縦位鉛錆状の羽状繩文を施文する花植下層式土器が出土しており、それに伴う条痕文施土器の可能性もあるが、土壤内からは繩文施土器が1点も検出されていない。従って、花植下層式以前の早期の条痕文土器と理解した。

第15図9、11は砾器で、砾表側からの片面剥離を中心とし、刃角の大きな調整を施す。9は長さ9.4cm、幅6cm、厚さ3.15cm、重さ195.4gを測る。11は長さ8.25cm、幅11.6cm、厚さ2.7cm、重さ282.1gを測る。

10は搔器で、長さ5.01cm、幅9.45cm、厚さ1.25cm、重さ53.9gを測る。

12は石核で、長さ4.1cm、幅7.95cm、厚さ8cm、重さ208.8gを測る。

第3表 土壙計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
S K1	G-5	1.56	1.37	0.27
S K2	G-5	0.85	0.68	0.07
S K3	F-3	0.80	0.59	0.19
S K4	F-3	0.52	(0.48)	0.06
S K5	F-3	1.09	0.80	0.07
S K6	F-3	0.90	0.65	0.08
S K7	G-5	0.65	0.50	0.10
S K8	E-4	0.68	0.62	0.13
S K9	E-4	1.25	0.40	0.14
S K10	E-4	0.86	0.61	0.25
S K11	E-4	0.83	0.51	0.13

遺構名	位置	長径	短径	深さ
S K12	G-4	0.70	0.37	0.08
S K13	F-G-4	0.68	0.58	0.16
S K14	F-4	0.75	0.40	0.10
S K15	G-4	0.73	0.47	0.05
S K16	F-4	0.68	0.52	0.14
S K17	G-3	0.71	0.60	0.09
S K18	F-3	1.05	0.66	0.55
S K19	B-5	0.78	(0.60)	0.15
S K20	B-5	0.81	0.52	0.16
S K21	B-5	0.84	0.37	0.04
S K22	G-5	1.02	0.70	0.24

3 集石土壙

集石土壙は調査区のほぼ中央部の南壁寄りにまとまって存在し、他の遺構と重複するが、確実に伴う土器が出土していないことから、時期を確定できなかった。

第1号集石土壙（第17図）

D-4 区に位置する。第2号住居跡の北柄に隣接するが、住居跡との関係は把握されない。プランは楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.84m、深さ0.27mを測る。土壙の覆土上半部に焼礫が集中しており、開口部では南側に焼礫が広がりを見せる。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破碎している。礫は総数502個検出され、総重量は82.2kgであった。遺物は出土していない。

第2号集石土壙（第17図）

E-4 区に位置する。第1号溝と重複するが、溝より古いものと思われる。プランはほぼ円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.28mを測る。土壙の底面に大きな扁平の閃錫岩2個が散かれ、その上に焼礫が詰まっている状態であった。開口部ではやや北側に焼礫が広がりを見せる。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破碎している。礫は総数

197個検出され、総重量は48kgであった。遺物は出土していない。

第3号集石土壙（第17図）

D-4 区に位置する。いくつかのビットと重複するが、新旧関係は不明である。プランはほぼ円形を呈し、長径1.3m、短径1.15m、深さ0.31mを測る。検出された3基の中で、最も規模の大きな集石土壙である。礫は比較的大きなものが多く、プラン内にぎっしりと詰まっていたが、第1号集石土壙と同様に、土壙の覆土上半部に集中していた。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破碎している。礫は総数534個検出され、総重量は169.6kgであった。遺物は出土していない。

以上の集石土壙は、遺物が出土していないため時期を決定できないが、近隣の遺跡に見られる集石土壙と類似する傾向がある。土壙底部に扁平礫を敷く様に据える手法は、中期の勝坂式終末から加曾利E式の前半段階に見られることが多い。本遺跡では、やや離れているが中期の勝坂式終末期の土壙が検出されており、グリッドにおいても加曾利E式の古い土器群が検出されていないことから、勝坂式終末期に比定されるものと思われる。

4 溝跡

第1号溝跡（第18図）

D-4～F-2区にかけて位置する。D-4区で第2号住居跡と重複し、E-3区で第2号集石土壙と重複する。本溝は途切れながら存在し、両端で鋸状に曲がり、斜面の勾配とほぼ並行することから、区画

溝と思われる。遺物は出土していない。

第2号溝跡（第18図）

F-3～G-3区に位置する。やや幅が広いが、第1号溝とほぼ平行するとと思われ、同様に区画溝と思われる。遺物は出土していない。

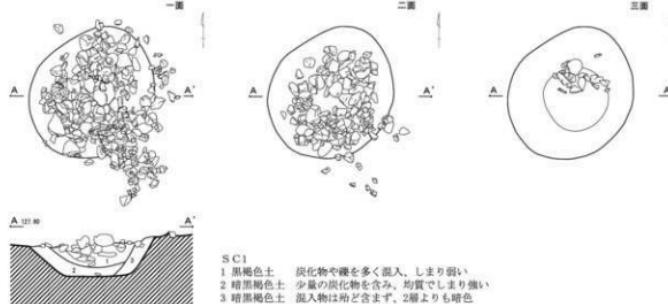
5 ビット跡

ビット跡は多数検出され、特にE-4区に集中し、住居跡の柱穴を構成するものも存在する可能性がある。また、F-3区からG-4区にかけてもビットが集中する傾向にあるが、この地域で遺物の出土が

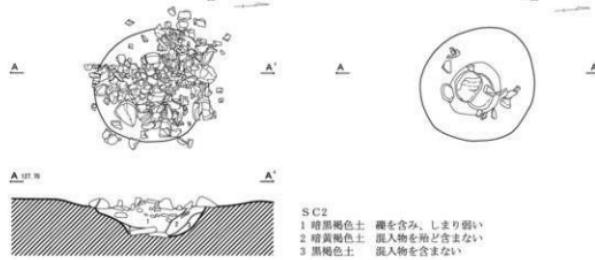
少なく、柱穴状のまとまりが見られないことから、住居跡の可能性は低いものと思われる。

他の地区もビットが散在するが、まとまりはみられない傾向にある。

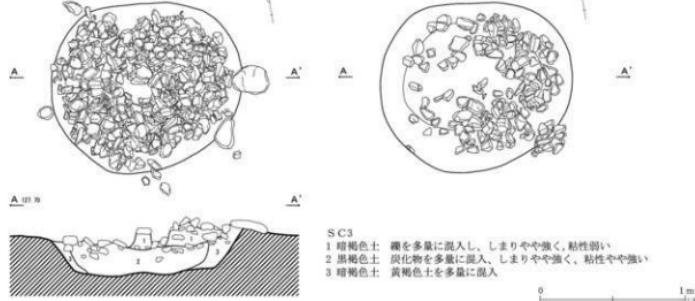
SC 1



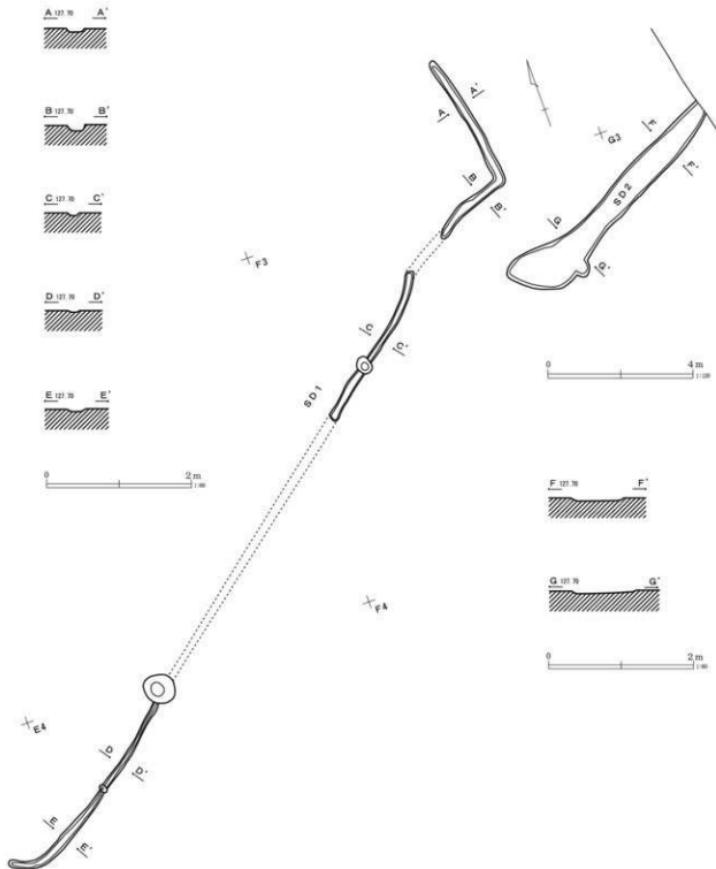
SC 2



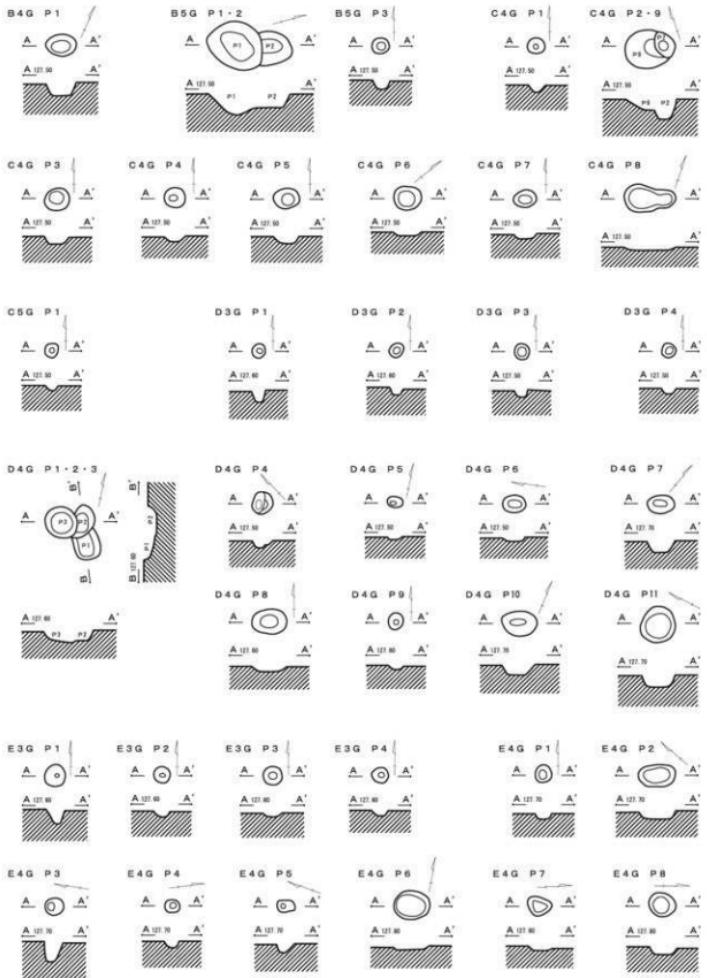
SC 3



第17図 集石土壤

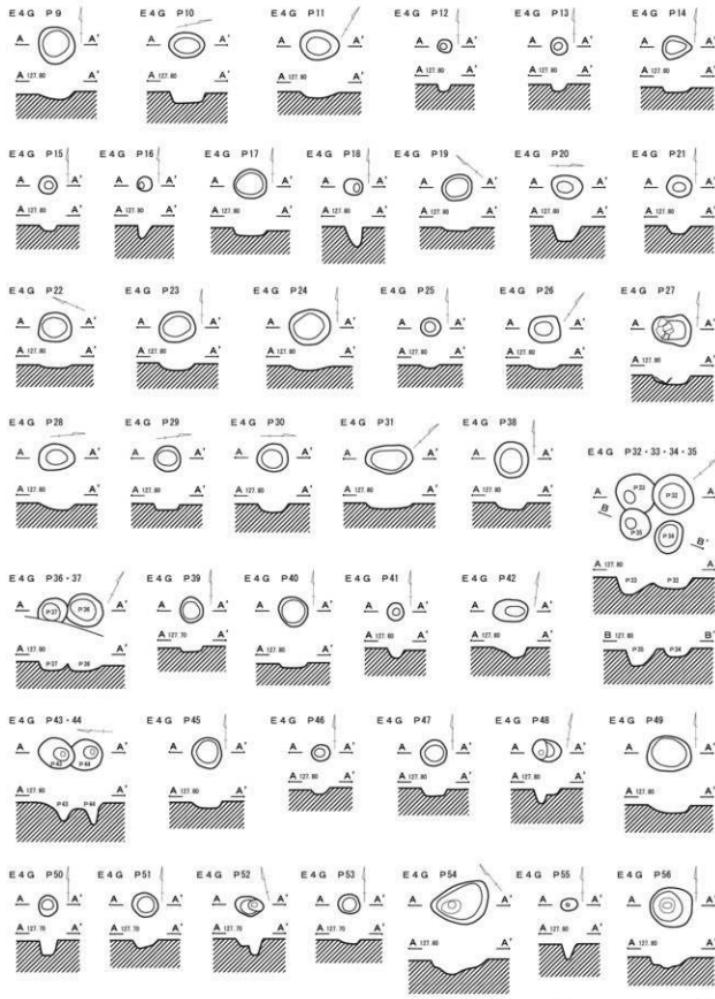


第18図 溝跡

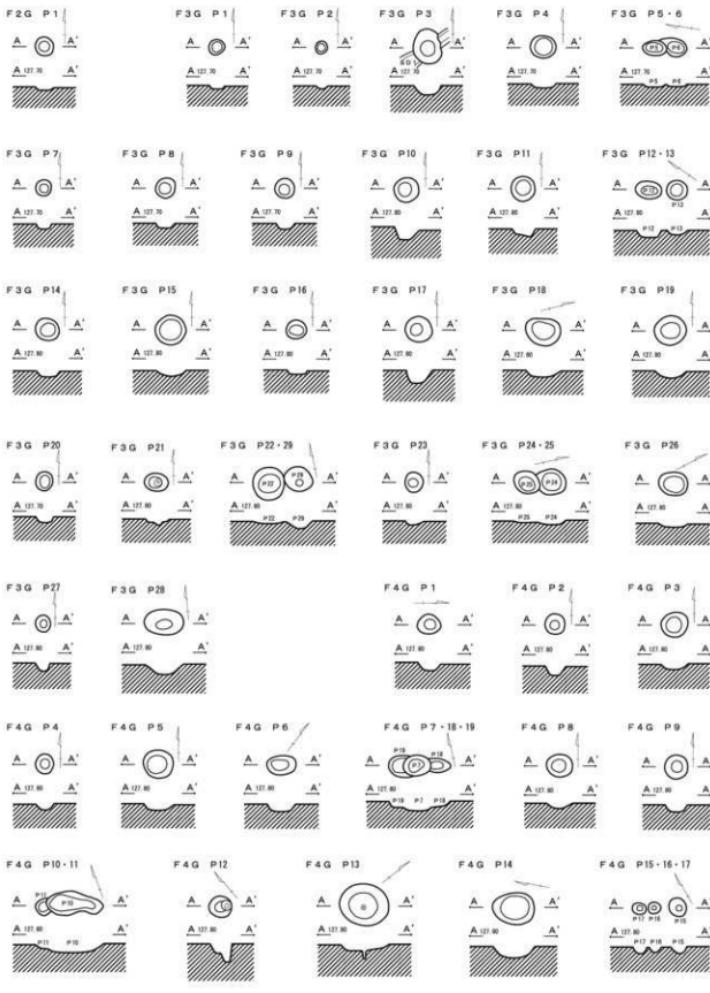


第19図 ピット跡 (1)

0 2m

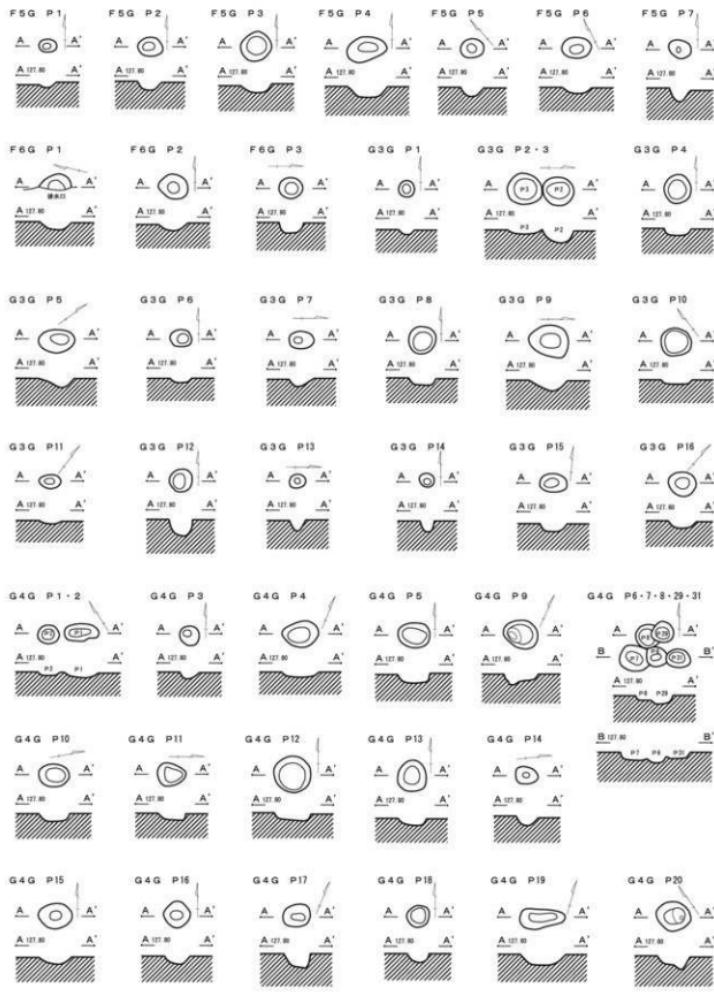


第20図 ピット跡 (2)



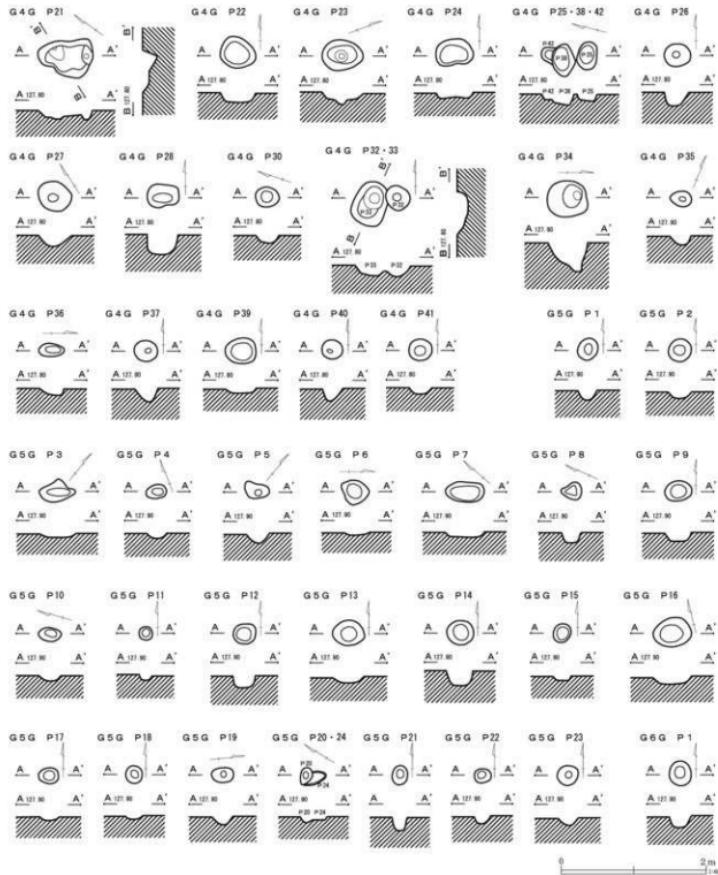
第21図 ピット跡 (3)

0 2m 1m



第22図 ピット跡 (4)

0 2m



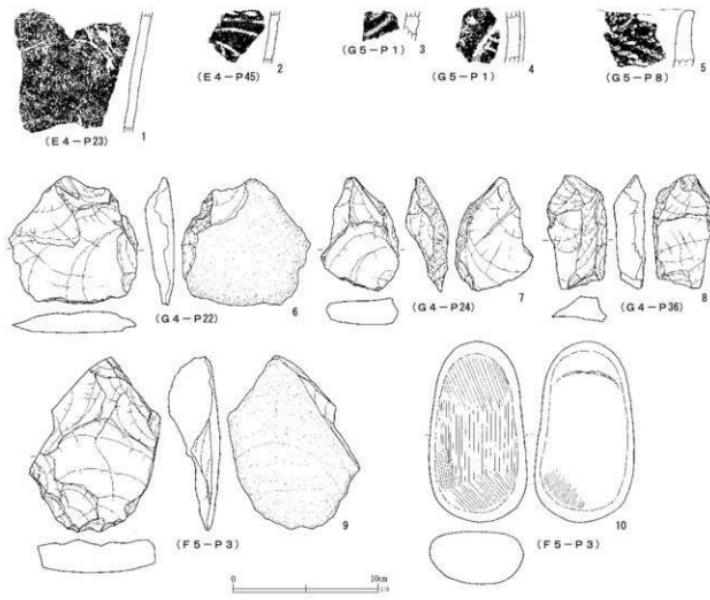
第23図 ピット跡(5)

第4表 集石土壤計測表

道標名	位置	長径	短径	深さ
S C1	D-4	0.91	0.84	0.27
S C2	E-4	0.90	0.80	0.28
S C3	E-4	1.30	1.15	0.31

第5表 溝跡計測表

道標名	位置	長さ	幅	深さ
S D1	D-4～F-2	(16.8) 27.1	0.24	0.08
S D2	F-3～G-3	0.70	0.88	0.05



第24図 ピット跡出土遺物

ピット出土遺物（第24図）

1はE-4区P23出土であり、晩期の深鉢形土器の無文の胴部破片である。

2はE-4区P45出土であり、横位の連続刺突文と、沈線の曲線モチーフを描く。晩期の所産と思われる。

3、4はG-5区P1出土であり、赤褐色を呈し、隆帯と太い沈線を施す。中期の勝板式に比定される。

5はG-5区P8出土であり、繊維を含み、口縁部に2段の縄の側面圧痕文を施す花種下層式土器の口縁部破片である。

6はG-4区P22出土の砂岩製の搔器であり、剥離の際のエッジに細かな調整剥離を施す。長さ

8.7cm、幅8.9cm、厚さ2cm、重さ130.3gを測る。

7はG-4区P24出土の砂岩製の搔器であり、剥離の際のエッジに調整剥離を施す。長さ7.85cm、幅5.3cm、厚さ2.85cm、重さ195.4gを測る。

8はG-4区P36出土のチャート製の剥片であり、長さ7.8cm、幅4.1cm、厚さ2.15cm、重さ64.6gを測る。

9はF-5区P3出土の砂岩製の礫器であり、長さ12cm、幅9.05cm、厚さ3.55cm、重さ304.4gを測る。

10はF-5区P3出土の閃緑岩製の磨石であり、長さ12.4cm、幅6.8cm、厚さ3.7cm、重さ462.3gを測る。

第6表 グリッドピット計測表

位置	道構名	長径	短径	深さ	位置	道構名	長径	短径	深さ
B-4	P1	0.42	0.31	0.17	E-4	P29	0.36	0.35	0.09
B-5	P1	0.75	0.63	0.25	E-4	P30	0.42	0.37	0.12
B-5	P2	0.47	(0.39)	0.19	E-4	P31	0.65	0.38	0.07
B-5	P3	0.24	0.21	0.13	E-4	P32	0.56	0.55	0.16
C-4	P1	0.24	0.22	0.11	E-4	P33	0.57	0.53	0.26
C-4	P2	0.39	0.28	0.28	E-4	P34	0.46	0.38	0.14
C-4	P3	0.34	0.30	0.10	E-4	P35	0.43	0.41	0.23
C-4	P4	0.29	0.28	0.07	E-4	P36	0.50	0.43	0.13
C-4	P5	0.36	0.28	0.10	E-4	P37	0.40	(0.31)	0.11
C-4	P6	0.38	0.32	0.05	E-4	P38	0.48	0.46	0.11
C-4	P7	0.32	0.25	0.06	E-4	P39	0.35	0.32	0.08
C-4	P8	0.70	0.34	0.04	E-4	P40	0.43	0.38	0.07
C-4	P9	0.52	(0.40)	0.15	E-4	P41	0.25	0.23	0.13
C-5	P1	0.20	0.18	0.07	E-4	P42	0.47	0.30	0.13
D-3	P1	0.20	0.17	0.17	E-4	P43	0.49	0.41	0.22
D-3	P2	0.21	0.18	0.12	E-4	P44	0.48	0.44	0.26
D-3	P3	0.22	0.20	0.09	E-4	P45	0.43	0.40	0.09
D-3	P4	0.20	0.19	0.07	E-4	P46	0.26	0.20	0.09
D-4	P1	0.35	(0.33)	0.13	E-4	P47	0.36	0.35	0.11
D-4	P2	0.47	(0.24)	0.15	E-4	P48	0.39	0.29	0.19
D-4	P3	0.45	0.44	0.17	E-4	P49	0.60	0.48	0.11
D-4	P4	0.31	0.29	0.10	E-4	P50	0.29	0.25	0.20
D-4	P5	0.23	0.15	0.04	E-4	P51	0.36	0.33	0.12
D-4	P6	0.32	0.24	0.06	E-4	P52	0.40	0.27	0.24
D-4	P7	0.39	0.26	0.17	E-4	P53	0.30	0.27	0.06
D-4	P8	0.48	0.35	0.07	E-4	P54	0.80	0.56	0.21
D-4	P9	0.23	0.20	0.06	E-4	P55	0.23	0.17	0.22
D-4	P10	0.50	0.35	0.15	E-4	P56	0.60	0.55	0.14
D-4	P11	0.51	0.46	0.17	F-2	P1	0.26	0.25	0.05
E-3	P1	0.30	0.28	0.20	F-3	P1	0.22	0.20	0.05
E-3	P2	0.23	0.23	0.08	F-3	P2	0.18	0.16	0.05
E-3	P3	0.25	0.25	0.06	F-3	P3	0.48	0.40	0.13
E-3	P4	0.23	0.23	0.07	F-3	P4	0.35	0.30	0.06
E-4	P1	0.24	0.23	0.08	F-3	P5	0.33	0.20	0.04
E-4	P2	0.51	0.29	0.12	F-3	P6	0.38	0.24	0.04
E-4	P3	0.26	0.23	0.2	F-3	P7	0.23	0.22	0.08
E-4	P4	0.20	0.17	0.10	F-3	P8	0.28	0.27	0.08
E-4	P5	0.24	0.16	0.12	F-3	P9	0.28	0.27	0.08
E-4	P6	0.49	0.39	0.05	F-3	P10	0.34	0.33	0.17
E-4	P7	0.33	0.26	0.07	F-3	P11	0.34	0.32	0.11
E-4	P8	0.37	0.33	0.10	F-3	P12	0.35	0.25	0.09
E-4	P9	0.50	0.50	0.12	F-3	P13	0.34	0.28	0.07
E-4	P10	0.49	0.35	0.16	F-3	P14	0.33	0.28	0.09
E-4	P11	0.54	0.40	0.08	F-3	P15	0.42	0.40	0.08
E-4	P12	0.19	0.17	0.10	F-3	P16	0.29	0.23	0.06
E-4	P13	0.23	0.23	0.10	F-3	P17	0.36	0.34	0.18
E-4	P14	0.40	0.30	0.07	F-3	P18	0.48	0.38	0.09
E-4	P15	0.25	0.25	0.08	F-3	P19	0.43	0.40	0.09
E-4	P16	0.20	0.20	0.17	F-3	P20	0.25	0.23	0.08
E-4	P17	0.45	0.40	0.11	F-3	P21	0.34	0.25	0.09
E-4	P18	0.25	0.22	0.28	F-3	P22	0.46	0.43	0.04
E-4	P19	0.41	0.36	0.05	F-3	P23	0.28	0.24	0.07
E-4	P20	0.42	0.32	0.21	F-3	P24	0.45	0.38	0.05
E-4	P21	0.34	0.29	0.11	F-3	P25	0.35	0.31	0.04
E-4	P22	0.44	0.40	0.04	F-3	P26	0.40	0.33	0.05
E-4	P23	0.50	0.41	0.10	F-3	P27	0.24	0.20	0.11
E-4	P24	0.56	0.48	0.07	F-3	P28	0.55	0.35	0.15
E-4	P25	0.27	0.25	0.05	F-3	P29	0.41	0.34	0.09
E-4	P26	0.43	0.37	0.07	F-4	P1	0.32	0.28	0.11
E-4	P27	0.43	0.33	0.11	F-4	P2	0.28	0.26	0.15
E-4	P28	0.49	0.35	0.10	F-4	P3	0.36	0.34	0.09

位置	造構名	長径	短径	深さ
F-4	P 4	0.28	0.25	0.09
F-4	P 5	0.40	0.39	0.09
F-4	P 6	0.40	0.26	0.10
F-4	P 7	0.37	0.29	0.12
F-4	P 8	0.35	0.30	0.08
F-4	P 9	0.33	0.30	0.10
F-4	P 10	0.80	0.33	0.13
F-4	P 11	0.22	(0.16)	0.05
F-4	P 12	0.32	0.31	0.27
F-4	P 13	0.66	0.56	0.20
F-4	P 14	0.57	0.45	0.17
F-4	P 15	0.27	0.24	0.10
F-4	P 16	0.18	0.16	0.08
F-4	P 17	0.20	0.16	0.09
F-4	P 18	0.269	0.20	0.06
F-4	P 19	0.30	(0.21)	0.07
F-5	P 1	0.25	0.19	0.08
F-5	P 2	0.35	0.26	0.12
F-5	P 3	0.43	0.40	0.13
F-5	P 4	0.55	0.30	0.15
F-5	P 5	0.32	0.26	0.13
F-5	P 6	0.41	0.29	0.08
F-5	P 7	0.33	0.25	0.20
F-6	P 1	0.44	(0.23)	0.10
F-6	P 2	0.41	0.35	0.10
F-6	P 3	0.33	0.28	0.15
G-3	P 1	0.23	0.22	0.08
G-3	P 2	0.43	0.39	0.19
G-3	P 3	0.48	0.41	0.07
G-3	P 4	0.38	0.38	0.10
G-3	P 5	0.49	0.33	0.13
G-3	P 6	0.30	0.24	0.07
G-3	P 7	0.33	0.24	0.13
G-3	P 8	0.38	0.36	0.09
G-3	P 9	0.55	0.42	0.15
G-3	P 10	0.42	0.38	0.08
G-3	P 11	0.30	0.19	0.05
G-3	P 12	0.31	0.33	0.23
G-3	P 13	0.21	0.19	0.15
G-3	P 14	0.20	0.20	0.16
G-3	P 15	0.38	0.25	0.12
G-3	P 16	0.38	0.33	0.08
G-4	P 1	0.48	0.25	0.08
G-4	P 2	0.30	0.26	0.07
G-4	P 3	0.28	0.27	0.09
G-4	P 4	0.50	0.36	0.07
G-4	P 5	0.45	0.35	0.15
G-4	P 6	0.32	0.28	0.15
G-4	P 7	0.409	0.34	0.12
G-4	P 8	0.32	(0.22)	0.07
G-4	P 9	0.49	0.38	0.15
G-4	P 10	0.43	0.31	0.10
G-4	P 11	0.38	0.30	0.09
G-4	P 12	0.51	0.50	0.10
G-4	P 13	0.43	0.39	0.12
G-4	P 14	0.30	0.24	0.13
G-4	P 15	0.46	0.35	0.11
G-4	P 16	0.38	0.36	0.11
G-4	P 17	0.36	0.31	0.20
G-4	P 18	0.31	0.29	0.12
G-4	P 19	0.63	0.25	0.15
G-4	P 20	0.48	0.41	0.18
G-4	P 21	0.75	0.45	0.14
G-4	P 22	0.49	0.41	0.13
G-4	P 23	0.56	0.42	0.16
G-4	P 24	0.52	0.34	0.08
G-4	P 25	0.38	0.27	0.09
G-4	P 26	0.36	0.31	0.19
G-4	P 27	0.48	0.39	0.16
G-4	P 28	0.43	0.30	0.28
G-4	P 29	0.30	0.30	0.13
G-4	P 30	0.32	0.27	0.11
G-4	P 31	0.35	0.25	0.08
G-4	P 32	0.35	0.31	0.16
G-4	P 33	0.59	0.45	0.16
G-4	P 34	0.54	0.50	0.40
G-4	P 35	0.28	0.21	0.12
G-4	P 36	0.35	0.18	0.10
G-4	P 37	0.32	0.29	0.19
G-4	P 38	0.44	0.33	0.15
G-4	P 39	0.43	0.35	0.07
G-4	P 40	0.28	0.26	0.17
G-4	P 41	0.31	0.27	0.09
G-4	P 42	0.20	(0.14)	0.07
G-5	P 1	0.30	0.28	0.13
G-5	P 2	0.21	0.21	0.10
G-5	P 3	0.50	0.30	0.06
G-5	P 4	0.28	0.19	0.07
G-5	P 5	0.32	0.19	0.14
G-5	P 6	0.36	0.33	0.06
G-5	P 7	0.54	0.28	0.08
G-5	P 8	0.28	0.23	0.15
G-5	P 9	0.36	0.26	0.13
G-5	P 10	0.31	0.19	0.07
G-5	P 11	0.18	0.17	0.07
G-5	P 12	0.31	0.26	0.16
G-5	P 13	0.44	0.35	0.09
G-5	P 14	0.38	0.33	0.21
G-5	P 15	0.26	0.24	0.07
G-5	P 16	0.52	0.39	0.11
G-5	P 17	0.28	0.20	0.05
G-5	P 18	0.23	0.23	0.05
G-5	P 19	0.30	0.19	0.12
G-5	P 20	0.27	0.16	0.08
G-5	P 21	0.26	0.21	0.18
G-5	P 22	0.25	0.20	0.11
G-5	P 23	0.29	0.27	0.11
G-5	P 24	0.33	0.18	0.04
G-6	P 1	0.34	0.30	0.14

6 グリッド出土遺物

(1) 繩文土器

本遺跡からは、量は少ないものの縄文時代の早期から晩期までの各時期の土器群が出土しており、ここでは代表的なものを第26図～第28図に示し、大別して説明を加えることとする。

第Ⅰ群土器 (1)

縄文時代早期の土器群を一括する。1は早期終末の条痕文系土器群である茅山下層式土器である。胴部に括れを持ち、不鮮明であるが上半部に縦位の沈線を施文する。胎土に繊維を含み、内外面に擦痕状の整形を施す。

他に、グリッドからは細片のみで、良好な土器群は出土していないが、第22号土壙からはさらに新しいと思われる条痕文系土器群終末期の土器が出土している。

第Ⅱ群土器 (2～26)

前期の土器群を一括する。

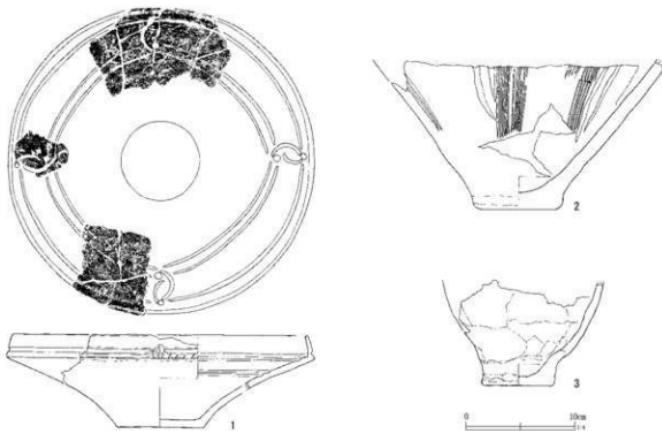
第1類 (2～21)

前期初頭の尖底の羽状縄文土器である花植下層式土器を一括する。胎土の多量の繊維を含み、条痕状整形は施さず、擦痕状整形を施す土器群である。2は口縁部破片で、緩やかな波状を呈し、口縁に沿って多条の2段R Lの縄の側面圧痕を横位に施文する。口縁裏面には、粗い条痕整形を施す。

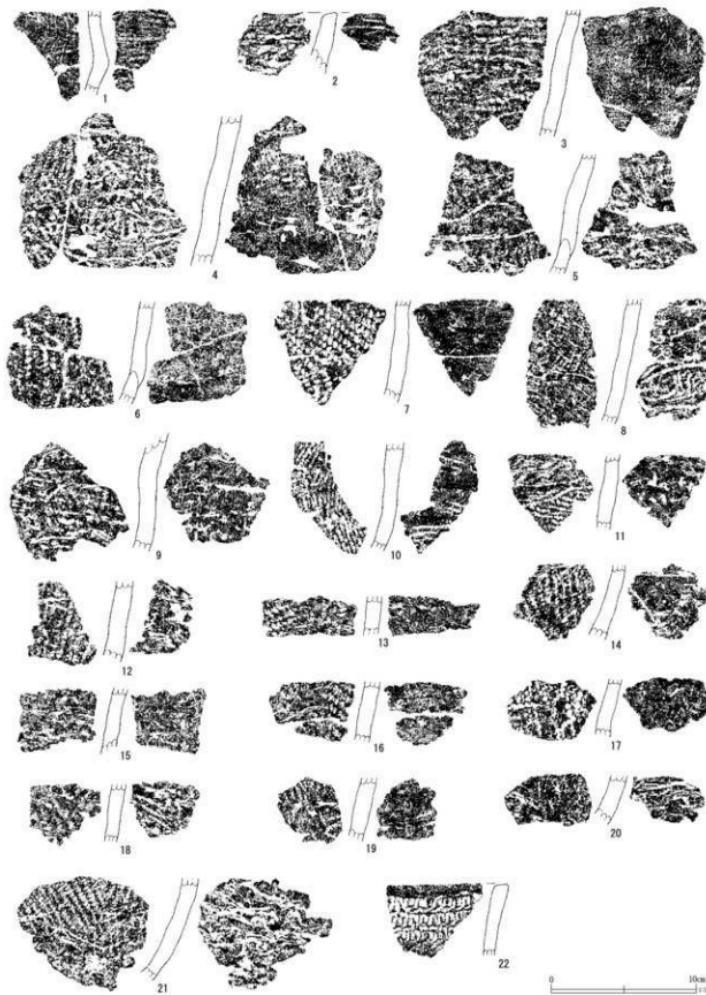
3～20は胴部破片で、側面圧痕と同様の多条2段R L縄文を横位や斜位に施文方向を変えて、縦位の菱形構成の銳角羽状縄文を施文する土器群である。いずれも繊維を多く含み、裏面は擦痕状整形を施す。21は底部付近の破片である。

第2類 (22)

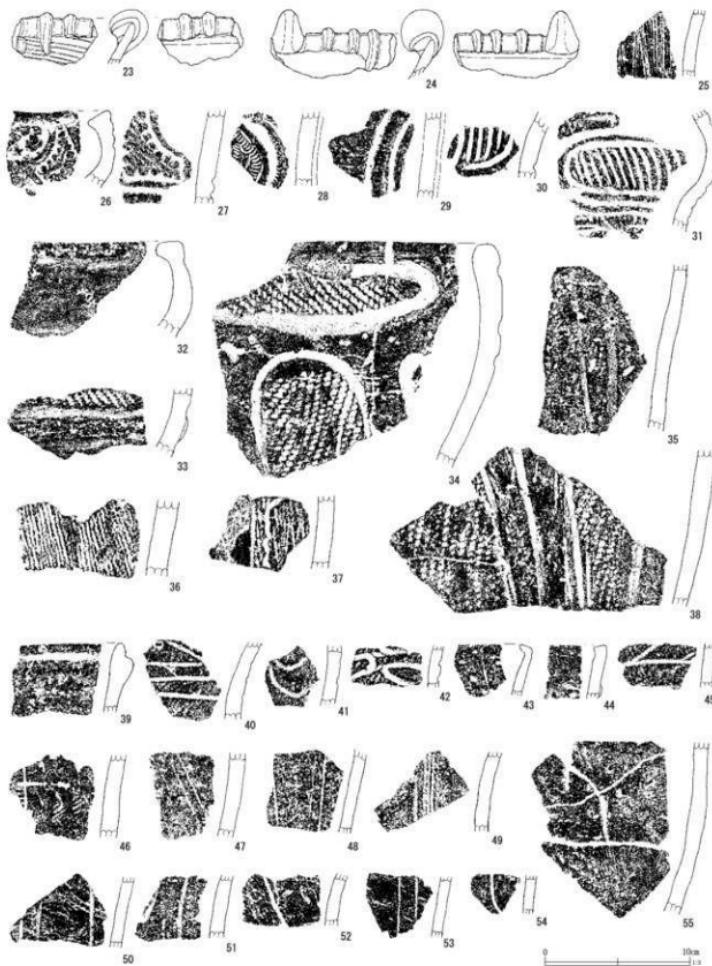
前期前半の繊維土器である関山式土器を一括する。22は口縁部破片で、角頭状の口縁部が立つ器形を呈し、多条L Rのループ文を3段口縁部に施文するものである。ループ文帯下はL Rの斜縄文帯となるが、ループ文帯と斜縄文帯が交互に施文されるも



第25図 グリッド出土土器 (1)



第26図 グリッド出土土器 (2)



第27図 グリッド出土土器 (3)



第28図 グリッド出土土器 (4)

のと思われる。関山Ⅱに比定される。

第3類（23~25）

前期末葉の無縫維土器である、諸磯c式土器を一括する。23、24は同一個体と思われ、口縁部が折り返し状を呈し、耳状貼付文を施文するものである。口唇部は折り返した上に、さらに粘土を巻きつけて複合口縁化しており、耳状貼付文の間には低平な貼付文を施文する。口縁部の地文には、横位の沈線を施文する。

25は条線文を縦位施文する胴部破片で、すでに地文化している状況が窺える。

以上、諸磯c式のやや新しい様相が窺える土器群である。

第Ⅲ群土器（26~36）

中期の土器群を一括する。

第1類（26~32）

中期中葉の勝坂式土器を一括するが、その中でも終末段階の土器群が多い。26、27は隆帯脇の区画沈線に沿って、半截竹管の刺突文を蓮華文風に施文するものである。26は内湾の強い口縁部破片で、口唇部内端が突出し、口唇部が幅広の内削状を呈する。27は胴部破片で、器面が荒れているが、単節R L繩文を地文に施文する。

28は刻みを施す隆帶で区画し、隆帯脇に2本沈線を沿わせ、蓮華状文を施文する。29も刻みを施す隆帶で区画し、隆帯脇に沈線を沿わせ、地文に沈線文を施文するが、不明瞭である。

30、31は沈線区画内に集合沈線を充填施文するもので、31は口縁部付近の破片、30は頸部付近の破片である。

32は無文の内湾する口縁が立つ器形を呈し、口縁内端が突出する。モチーフを持つ円筒形の胴部が付くものと思われる。

第2類（33~36）

中期末葉の加曾利EⅢ式土器を一括する。33、34は口縁部文様帯を持つキャリバー系土器で、口縁部文様帯は低平な隆帶で区画される。34は口縁部に横

長の楕円区画文を施し、胴部に逆U字状態垂文と蕨手状沈線懸垂文を垂下する。楕円区画文と逆U字状懸垂文内には単節R L繩文を充填施文する。33の口縁部区画内にもRLを横位施文する。

35、38は磨消懸垂文を垂下する胴部破片で、38は3本沈線の磨消懸垂文である。いずれも地文に単節R L繩文を、粗く縦位施文する。36は撚糸Lを地文とし、37は撚糸地文上に蛇行沈線懸垂文を垂下する。36は他の破片より若干時期が古くなる可能性がある。

第IV群土器（39~73）

後期の土器群を一括する。

第1類（2、39~55）

後期前葉の堀之内式土器を一括する。39は無文の口縁部が肥厚して開き、口縁に沈線を廻らす。2は2沈線文が垂下し、地文に条線文を施文する深鉢形土器の底部破片で、底径8cm、現存高13.2cmを測る。40は単節R L地文上に3本沈線で文様を描くもので、41~43は単沈線で曲線的なモチーフを描く土器群である。堀之内I式の新しい段階に比定される土器群である。

43、44口縁裏に沈線を廻らし、口縁部に横位隆帶の区画を施す深鉢形土器である。45は横位沈線区画に斜行する沈線を施し、46は地文繩文上に縦位沈線を垂下する。器面はナデられているが、地文にLR繩文が微かに観察される。47~54は無地文上に、縦位方向の沈線や条線文を施文するもので、55は無文土器である。以上は堀之内II式に比定される土器群である。

第2類（1、56~67）

後期中葉の加曾利B式土器を一括する。1は内文を持つ浅鉢で、二重の二本沈線を対弧線文で4単位に区切り、沈線間に単節R L繩文を施文する。対弧線は盲孔を基点にして施文する。

56~60は口縁部の開く深鉢形土器で、56は口縁部が外削状に内折し、外面に2本の横位沈線を施文する。内面には隆帶を廻らせて口縁部を区画し、口唇

直下に連続刺突文を廻らせている。さらに隆帶下に、何条かの沈線を施文するものと思われるが、1本のみ確認される。57は多条沈線の磨消調文帶に、クラシック沈線の区切り文を施文する。内面には3本の平行沈線を施文し、斜位の細沈線を密に施文する。

58~60は口縁部に押圧を施した低隆帶をめぐらすもので、60の内面には平行沈線が廻る。

61、62は横位の平行沈線と地文に単節RLを施文する胴部破片である。

63は口縁部が大きく開く器形で、粗い斜格子目文を描き、口縁部内面に沈線を廻らす。64も無文の口縁部が開く器形と思われ、内面に沈線を廻らす。

67は口縁部がやや内折する低隆帶の段帶状を呈し、粗い押圧を施すものである。口縁部裏面には凹線状の沈線が廻る。

65、66は綱文のみ施文する土器群で、65は波状縁を呈し、波頂部に刻みを施す。65、66は地文に単節RLを横位施文する。

以上、56~62、64~66は加曾利B I式、67がB II式、63がB III式に比定されよう。

第3類 (68~70)

後期終末の安行式土器を一括する。68は口縁部が内湾する瓢形の帶綱文系土器で、口縁部に単節RL綱文を施文する。69は緩い波状の深鉢形土器で、口縁部がやや屈曲し、縱長の貼付文を施す。口縁部の隆帶脇と胴部に斜行する平行沈線を施文する。70は口唇上から縱長の貼付文を施し、器面が荒れているために不鮮明であるが、口縁部にはRL綱文の痕跡が見られる。以上、安行II式に比定されよう。

第V群土器

晩期の土器群を一括する。

第1類 (71~113)

晩期初頭の安行IIIa式土器を一括する。71は波状口縁の帶綱文系土器で、波底部に縦位の、文様の交点に横長の瘤状の、それぞれ刻みを施す貼付文を施文する。また、区画の低隆帶には細かな刻みを施しているが、器面が荒れているために不鮮明である。72

はやや瘤が背高であり、器形も内湾が強く、浅い沈線で弧線を合わせるモチーフを描いている。時期が不明瞭であるが、器壁が薄く、描出沈線文も浅くて弱いことから晩期に含めた。

74~92は玉抱き三叉文や入り組み三叉文を施文する土器群である。74~81は口縁部破片で、77~79は波状縁を呈する。74、75は平縁で、75は丸頭の突起が付く。両者とも沈線の梢円文を挟む三叉文を施文するもので、75は突起下に二重の沈線による梢円文を小さな三叉文で囲む構成を探る。76は横位の沈線から弧状沈線文が派生しており、器面は良く磨かれ。類似の構成を持つものとして、72、81、85があげられる。

77~79の波状口縁では、波頂部下に三叉文や玉抱き三叉文を施文する。

83、88、89は三叉文や対弧状の弧線文を施文するもので、83、86、91、92のように胴部破片は横位の平行沈線と組み合うものが多い。平行沈線間は単節LR綱文を施文する。

以上の土器群は、細砂粒を多く含み、赤褐色から暗赤褐色を呈するものが多く、器面の荒れが著しい。

93~95は紐線文系の土器群で、93、96はやや肥厚する口縁部を呈し、94は二連の押圧刺突文を施す。95は折り返し状の口縁部を持ち、いずれも無文である。97は輪積みの痕跡から、この種の胴部破片であると思われる。いずれも砂粒を多く含み、器面が荒れている。

99~104は綱文が施文される破片で、原体はいずれも細かな単節LRである。

106は壺の頸部と思われるが、沈線が廻り、九曲が強い器形を呈する。

73、107~111は無文土器の口縁部で、73は内湾が強く、107~110はやや口縁部が内湾する器形で、111は浅鉢状に大きく開く器形である。

3、112、113は底部破片で、所属時期は不明であるが、3は指頭整形痕が残り、113は粗製の紐線文土器の底部と思われる。

(2) 石器

今回の調査では、剥片などを合わせると多数の石器が出土している。ここではグリッド出土の代表的な石器を一括し、それぞれ器種ごとに分類した。計測値や石質については計測表にまとめてある。

棒状石器

1は乳白色を呈する均質な滑石を素材とする。長さ1.6cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmと非常に小形のものである。上半部は欠損する。多面体状で細長く、長軸方向に多数の面取り跡が残されており、それぞれが平坦である。下端も先を尖らせるような円錐状の面取りが施されている。本例のような石器は出土例が少なく、どのような性格を有する石器か今後注目されよう。

石錘

2、4はやや平たく、丸い縛の両端に抉り調整を入れている。3、5はやや細長く扁平な縛の両端に抉り調整をいれている。抉れた縛辺にはわずかではあるが磨耗した痕跡がみられる。いずれも砂岩製。

磨製石斧

6、7、20は磨製石斧あるいはその未成品と考えられるものである。6は横断面が方形状を呈するもので、いわゆる定角式の石斧である。基部と刃部に剥離痕が残るがこれは、使用時の欠損の可能性が高い。表面と側縁部が接する部分にわずかに敲打痕が残る他は全体的に丁寧に磨きあげられている。砂岩製。7は磨製石斧の未成品と考えられるが、その他の可能性としては小形の石剣の未成品も考えられよう。両側縁、下端部には形状を整える調整剥離が顕著に行われている。表面、裏面ともに研磨されており平坦である。基部側にも基部を丸く平坦にする面取りがされる。器面には、研磨痕の間に、敲打痕を残す部分がある。緑泥片岩製。20は表面上半部にやや大きな剥離が施される。側縁部はわずかな調整剥離が施される。表面はわずかな敲打痕であるが、裏面には顕著な敲打痕が残されており、あばた状である。形状は整わず製作途上のものであろう。

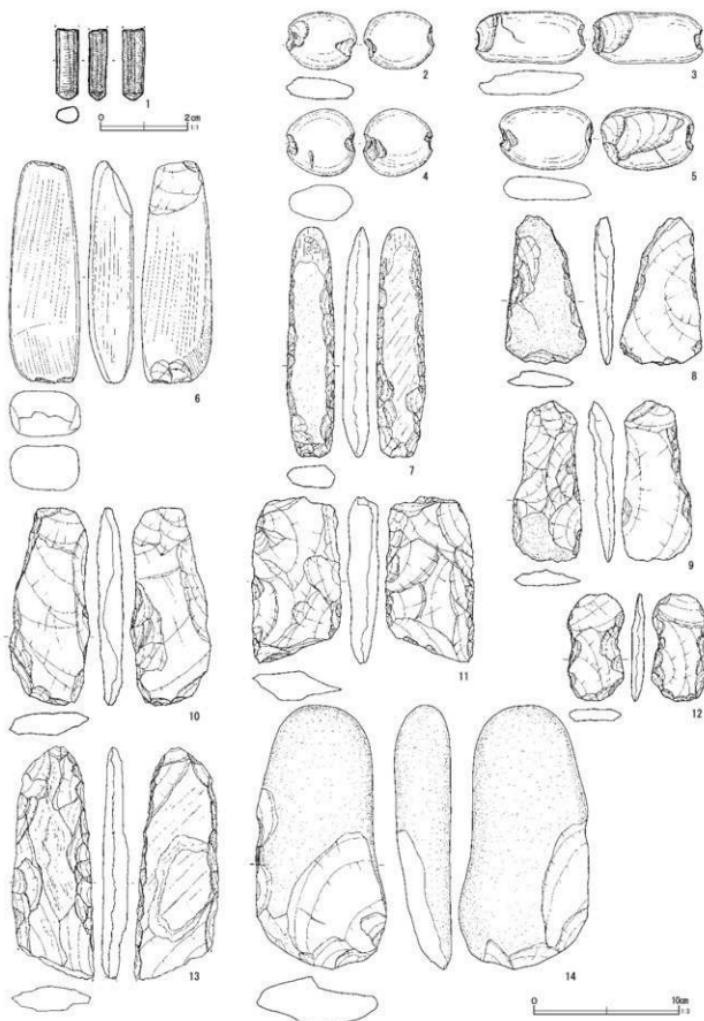
打製石斧

8、9は刃部に最大幅があるのでいわゆる撥形を呈するものである。8は扁平な縛を横割りにした剥片を素材とし、剥片の形状を生かしながら、両側縁にわずかな調整を行い形状を整えている。ホルンフェルス製。9も横長の剥片を素材としている。裏面から表面側にやや大きな剥離がなされ、その後、左側縁表面側から裏面側に向かって細かい調整剥離が施され、形状が整えられる。砂岩製。8、9共に未加工の自然面を刃部として生かしている。刃部表面側は顕著に磨耗している。

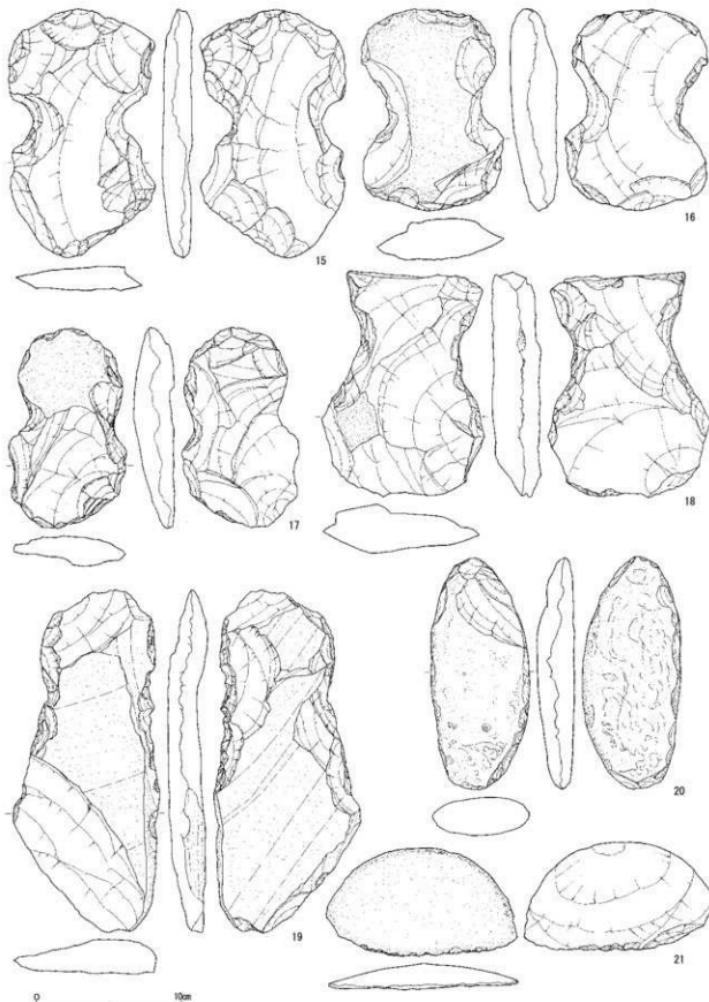
10、11、13は側縁がほぼ平行するタイプである。10は縦長の剥片を素材としており、側縁部、刃部の形状を整えるためのやや細かい調整が施される。砂岩製。11はおそらく横長剥片を素材とする。まず、両面から大振りな剥離が施され大まかな形状が整えられた後、片面側を中心に細かい剥離により形状が整えられる。刃部には大きな剥離面が残され鋭いエッジとなっている。折損部の可能性もあるが細かい刃こぼれ状の剥離痕が残り、刃部として利用していた可能性もある。砂岩製。13は板状の緑泥片岩を素材とし、両側縁に形状を整える細かい調整加工がなされる。下端は欠損している。

14は自然縛の一端に大振りな調整加工を施し刃部とする礫器である可能性があるが、その形状から打製石斧の未成品の可能性が高い。風化の激しい白色のホルンフェルスを素材としているため剥離面が不明瞭である。

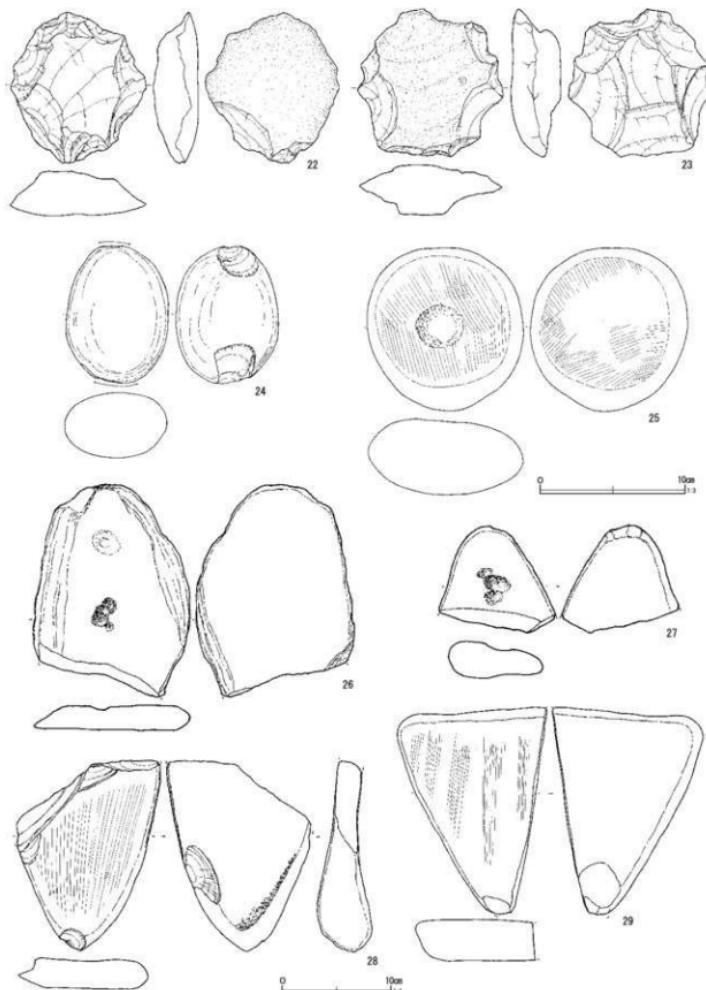
12、15、16、17、18、19は両側縁部に抉りが入るものでいわゆる分銅形を呈するものである。12は板状の剥片を素材とし抉り部分に大きな調整が入る。側縁部、下端部には細かい調整が施される。上端部には細かい調整は施されず、鋭いエッジが形成されている。ホルンフェルス製。15は横長の板状の剥片を素材としていると思われる。抉りは概して深い。上端は弧刃、下端は三角を呈し尖がる刃部となって



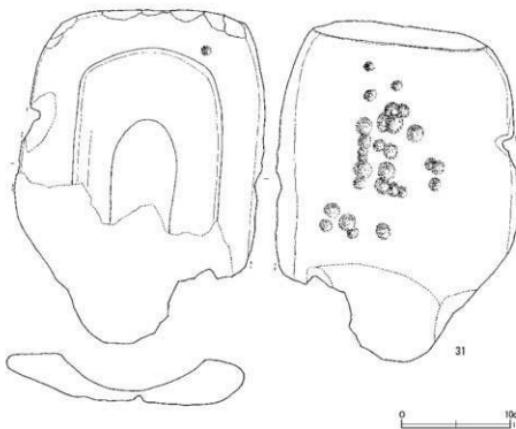
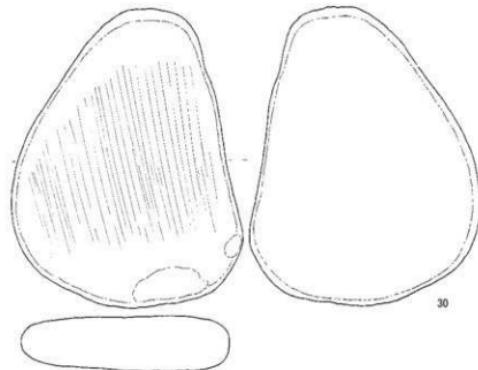
第29図 グリッド出土石器 (1)



第30図 グリッド出土石器（2）

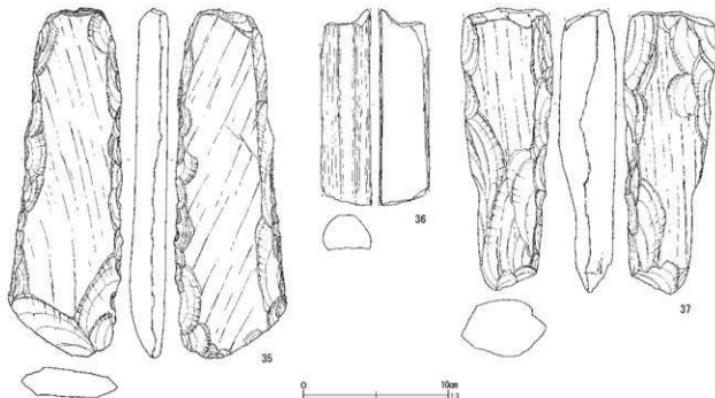
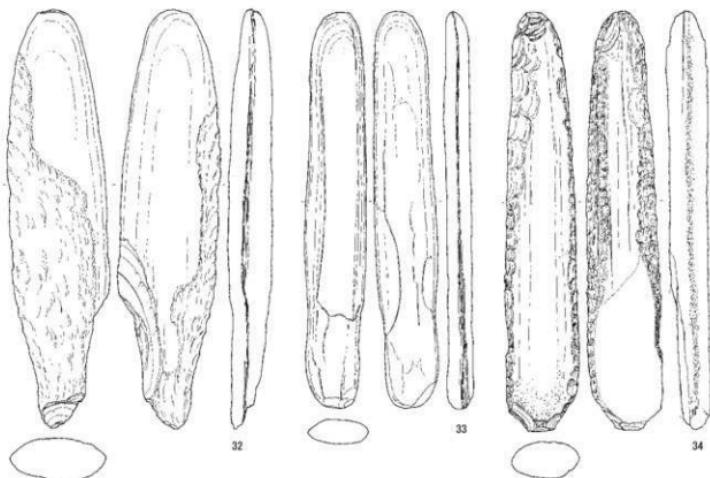


第31図 グリッド出土石器 (3)



0 10cm

第32図 グリッド出土石器 (4)



第33図 グリッド出土石器 (5)

いる。砂岩製。16は表面に縛面を多く残す。横長の剥片を素材としている。上端、下端共にきれいな弧刃をなす。抉りは概して深い。砂岩製。17は表面上半部に縛面を残している。この縛面の有するゆるやかなカーブを利用して上端の刃部は形成されている。この縛面は使用により顕著に磨耗している。砂岩製。

18は上端部が折損している。表面の一部に縛面を残す。抉り部分には顕著な磨耗が見られる。砂岩製。

19は板状を呈する緑泥片岩を素材とする。自然面を多く残している。加工は板状縛の縁辺部を中心として行われ、素材形状を大きく変えていない。

撞器

21は扁平な自然縛を半削した素材で片側に縛面を残す。打製石斧あるいは磨製石斧の調整剝片である可能性がある。下端部には表裏共に刃こぼれ状の細かい剝離痕が連続する。意図的な二次加工であるかは不明である。使用による刃こぼれである可能性もある。ホルンフェルス製。

礫器

22、23は片面側に縛面を残し、主に縛面側から全周するように調整剝離を行い、最終的に亀甲状を呈するものである。これは石核である可能性も考えられよう。これと同様な石器は住居等の遺構でも出土している。22は砂岩、23はホルンフェルス製である。

敲石

24はやや扁平だが厚みのある円縛を素材とする。長軸の両端に敲打によるとと思われる剝離痕が残る。この剝離痕縁辺部に顕著な潰れ痕が残り、多数の使用が認められる。白っぽいカコウ岩質の閃綠岩。

磨石

25はやや扁平な、円形を呈する縛を素材とする。縛の表裏に使用面があり、面取りされたかのように平坦である。表面側中央部には極めて浅い凹みが見られるが、凹石の使用の結果残された可能性は低い。表面の剥落と考えた方がよいと思われる。安山岩製。

凹石

26、27は凹石である。26は緑泥片岩製の板状扁平

縛を素材とする。上端部の一部と下半部を欠損する。表面上半部には極めて深い凹みが一箇所、中央部にはやや深い凹みが4箇所連結する。27も下半部を欠損する。凹みはやや深く中央部に3箇所連続する。安山岩製。

石皿

28~31は石皿である。28は下端が尖る扁平な縛を素材としている。上半部を欠損している。表面側は使用により平坦である。外縁部から中央部に向かってなだらかに窪んでいる。右側面部裏面側、左側縁面部裏面側の縛の稜線部分には細かい敲打の痕跡が残っており、石皿の形状を整えるためのものと考えられる。緑泥片岩製。29は残存形態が、平面的に三角形を呈する。右半分を欠いている。使用面は極めて平坦であり、皿状の窪みは存在しない。自然縛の形状を生かしている。砂岩製。30も29と同様で自然縛の形状を生かし整形は行われていない。磨り跡は器体縁辺部よりも中央側に残る。使用面は平坦であり、それほど継続した使用は行われていないと考えられる。安山岩製。31はいわゆる有縁石皿である。下半部は欠損している。平面形は長方形を呈す。厚さは極めて薄く使いこまれている。凹石に転用されているようであり、表面に1箇所、裏面に27箇所の凹みがのこる。緑泥片岩製。

石剣

石剣はすべて緑泥片岩製である。32は下半部に抉りを入れて柄を作出している。左側縁部を中心として敲打痕が器体を覆うように残っている。製作途中の未完成であろう。33は節理のよく発達した緑泥片岩を素材としていて、器面には凹凸がある。研磨されているが、素材形状をそれほど変えていないと思われる。34は両側縁、先端部、基部に両面加工を施して全体の形状を整えている。表面基部周辺、両側縁部には敲打痕が残っている。最終的な研磨をする以前の段階であろう。35は直接打撃により大まかな形状を整える段階のものであろう。敲打痕、研磨痕等は見当たらない。37は他の石剣が扁平なのに対し

第7表 第1号住居跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ		
7-12	孫器	4.8	4.6	0.9	30.4	緑色岩
13	石鍬	6.2	3.6	1.1	39.0	砂岩
14	磨製石斧	16.7	7.4	3.3	694.8	緑色岩
15	磨製石斧 未製品	17.5	11.8	6.6	1886.9	緑色岩
16	磨石	12.0	8.0	6.1	955.5	安山岩

第8表 第2号住居跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ		
11-32	石鍬	1.5	1.1	0.2	0.2	チャート
33	石鍬	2.2	1.0	0.9	1.7	瑪瑙
34	剥片	4.7	3.8	1.4	20.4	緑泥岩
35	剥片	2.7	1.9	0.8	3.7	チャート
36	剥片	3.0	1.7	1.6	7.3	チャート
37	剥片	3.3	2.3	1.2	8.5	赤玉岩
38	剥片	2.2	1.9	0.7	1.6	墨耀石
39	小玉	0.8	0.8	0.3	0.6	翡翠
40	石鍬	4.6	6.5	1.5	54.1	砂岩
41	打製石斧	12.4	6.9	3.0	258.4	砂岩
42	打製石斧	15.3	8.1	3.7	518.4	砂岩
43	磨製石斧	14.1	7.5	5.8	843.5	緑色岩
44	鍬器	12.3	10.7	4.7	733.0	砂岩
45	石劍	18.7	5.2	3.2	495.6	緑泥岩
46	磨石	10.8	9.8	4.5	658.2	安山岩
47	石核	29.0	27.2	6.2	7593.0	砂岩

第9表 土壤出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ		
14-7	石斧	13.1	6.7	2.9	233.1	砂岩
15-9	鍬器	9.4	6.0	3.2	195.4	安山岩
10	孫器	5.0	9.5	1.3	53.9	緑泥岩
11	孫器	8.3	11.6	2.7	282.1	黒色頁岩
12	石核	4.1	8.0	8.0	208.8	緑泥岩

第10表 ピット跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ		
24-6	孫器	8.7	8.9	2.0	130.3	黒色頁岩
7	孫器	7.9	5.3	2.9	80.2	頁岩
8	剥片	7.8	4.1	2.2	64.6	チャート
9	鍬器	12.0	9.1	3.6	304.4	緑泥岩
10	磨石	12.4	6.8	3.7	462.3	閃綠岩

やや断面が丸く棒状である。上半部を欠損している。
大きな剥離により形状を整えている。断面形態から
は石剣というよりは石棒の未製品の可能性もある。

石棒

第11表 グリッド出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ		
29-1	棒状石器	1.6	0.5	0.4	0.5	滑石
2	石鍬	3.9	4.9	1.6	41.4	砂岩
3	石鍬	3.6	7.5	1.9	68.7	砂岩
4	石鍬	4.6	4.8	2.4	69.2	砂岩
5	石鍬	4.3	6.4	1.7	65.0	砂岩
6	磨製石斧	15.3	4.9	3.2	349.6	砂岩
7	磨製石斧	15.3	3.3	1.8	149.0	緑泥岩
8	打製石斧	10.2	5.6	1.4	67.3	緑泥岩
9	打製石斧	11.1	4.8	1.8	72.1	砂岩
10	打製石斧	13.7	5.5	1.8	153.9	砂岩
11	打製石斧	11.5	6.1	2.1	180.7	砂岩
12	打製石斧	7.4	3.9	0.9	31.8	緑泥岩
13	打製石斧	16.0	5.7	1.8	196.7	緑泥岩
14	打製石斧	18.1	9.0	3.9	760.5	緑泥岩
30-15	打製石斧	17.0	10.1	2.1	419.5	砂岩
16	打製石斧	13.8	9.8	3.2	498.4	砂岩
17	打製石斧	13.8	8.1	2.8	292.9	砂岩
18	打製石斧	15.5	11.2	3.4	615.4	砂岩
19	打製石斧	23.5	10.1	2.7	771.2	砂岩
20	磨製石斧	16.0	6.8	2.6	405.0	緑色岩
21	鍬器	7.4	13.1	1.8	172.2	緑泥岩
31-22	鍬器	10.4	9.3	3.1	280.4	砂岩
23	鍬器	10.1	10.0	3.5	340.8	緑泥岩
24	敲石	9.4	7.1	4.7	409.3	カコ岩
25	磨石	11.2	10.8	5.3	880.7	安山岩
26	回石	19.7	14.5	2.6	1110.0	緑泥岩
27	回石	9.8	10.8	3.8	317.3	安山岩
28	石皿	17.5	13.2	5.0	1158.0	緑泥岩
29	石皿	19.0	13.8	4.1	1200.0	砂岩
32-30	石皿	27.5	21.3	4.9	4120.0	安山岩
31	石皿	30.8	22.2	1.2	3850.0	緑泥岩
33-32	石劍	28.8	7.1	3.2	842.0	緑泥岩
33	石劍	27.3	4.3	1.9	376.8	緑泥岩
34	石劍	28.7	5.1	3.0	612.6	緑泥岩
35	石劍	24.1	7.8	2.5	677.2	緑泥岩
36	石棒	13.5	3.5	2.6	194.4	緑泥岩
37	石劍	19.4	6.4	3.9	620.0	緑泥岩

36は石棒である。上下両端、そして長軸方向で欠損している。断面形態は円形と推定され、研磨により形状が整えられている。緑泥岩製。

V 調査の成果と提起する諸問題

1 中期中葉の土器群について

中野遺跡からは、中期中葉の土壙1基が検出されている。この第1号土壙から、ほぼ完形の土器が2個体出土しており、他遺跡の類似例との比較検討の上、それぞれの土器の由来や位置付けを行って置きたいと思う。

第1号土壙（第14図）出土土器1、2は、内湾する口縁部が大きく外反し、円筒形の胴部が付く器形を呈し、文様帶の構成は異なるが、ほぼ類似の器形と看做すことができる。1は口縁部文様帶と頸部文様帶、2は無文の口縁部と胴部文様帶を持つという構成である。2は胴部に勝坂式終末期の文様構成を配置することから型式的帰属が明瞭であるが、1については多くの要素を持ち、それぞれの要素の解題を行わなければならない。

第34団には、中野遺跡第1号土壙1と類似の文様や文様帶構成、器形を呈する県内の資料を集めてみた。それぞれの土器群の比較の上、1との関係性を紐解いてみたい。

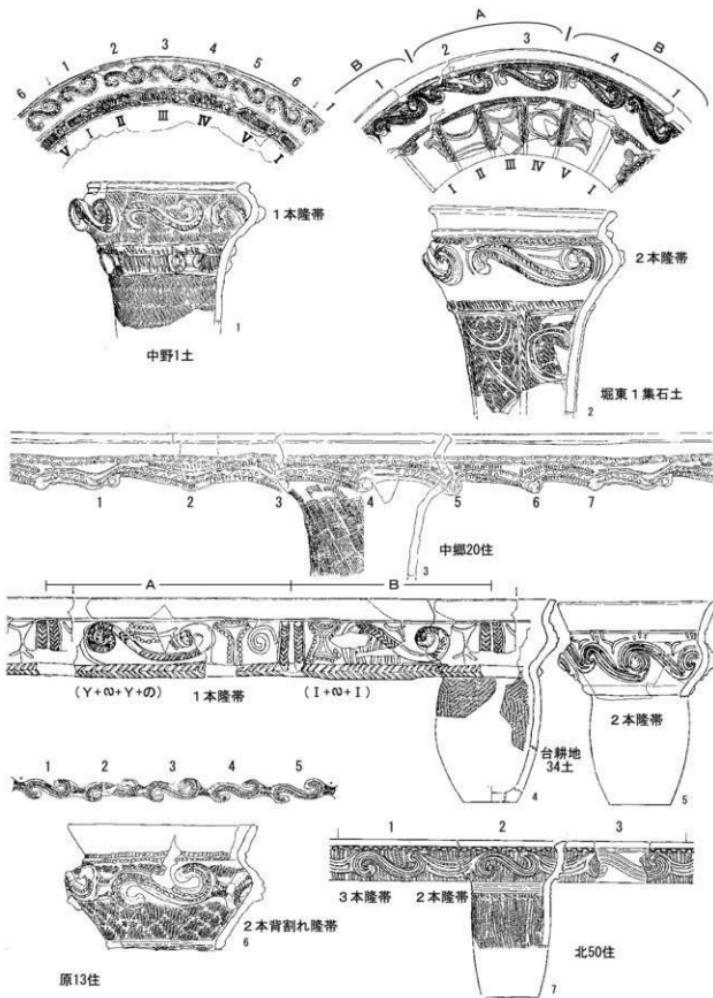
第34団1は中野遺跡第1号土壙出土土器であるが、口縁部に横S字状隆帯文を施文し、頸部に渦巻文を伴う梢円区画文を隆帯で施文する、比較的単純なモチーフ構成を呈する。口縁部の横S字状隆帯文はほぼ同じ形状で1～6の6単位に構成される。しかし、頸部の梢円区画文はI～Vの5単位で構成されている。口縁部と頸部の構成が異なり、口縁部に規制されずに頸部文様帶が展開していることが理解される。また、口縁部を含み、器面全面に単節R.Lを横位施文することも特徴的である。

2は深谷市堀東遺跡（金子2000）第1号集石土壙出土で、器形等1とよく類似する。2は無文の口縁部がやや高く迫り出して外反し、内湾する口縁部に横S字状隆帯文を1～4の4単位で施文する。胴部は隆帯の縦位区画の単位文を、I～Vの5單で施文している。細かく文様展開を観察すると、口縁部文様

帯は背割れの隆帯で横S字状文を施文するが、單位文間の区切りや、区画内充填文に相違が見られる。まず、4単位のS字文間は1と2の間が背割れ隆帯の連続文、2と3の間がY字状の三叉文、3と4の間が縦位の3本沈線、4と1の間が縦位の1本沈線で仕切られている。また、充填文は1が三叉文と2個の円形竹管文、2が三叉文、3が三叉文、4が三叉文と1個の円形竹管文を施文する。2、3が同一の構成で、4と1が同様な構成となるが、円形竹管の個数や位置を変えている。S字文はそれぞれ区切られ、独立しているが、同じ様なモチーフを組み合わせると、(2+3)+(4+1)となり、A(a+a')+A'(b+b')の構成になる。さらに、連結要素を重視すると、連結される1と2、分離される3と4の二項の対立が考えられる。しかし、4と1は連結線こそないがS字文が接しており、連結の意識が看取される。このように、4単位であるが故に明瞭な対称性の崩しが行われていないが、円環的に少しずつ変化させながら対称性を避けている様子が窺われる。4単位構成の整然とした横S字状隆帯文の配置は大木8a式的に特徴的と言えるが、その中に対称性を嫌う勝坂式の原理を織り込ませていると判断される。

また、胴部は5単位に区画しており、IとIVに円形のモチーフを描き、II、III、Vに上下に分割するモチーフを描いている。IとIVの円形モチーフを中心として文様配置を見ると、(I+II+III)+(IV+V)の勝坂式的な構成が把握され、二項を対立させながらも、単位とそれぞれのモチーフで対称性を崩していることが理解される。

3は嵐山町中郷遺跡（中島1982）第2号住居跡の剖体土器で、口縁部が球形と言うより「く」状の屈曲を持ち、その部分に弧状に連結する小さな渦巻文を施文するものである。渦巻文は突起状を呈し、渦



第34図 中期中葉土器群の文様構造

を巻かない箇所もある。渦巻文は7単位に施文しており、1の渦巻き部分がやや右にずれて円形の単位文化し、3~6が渦を巻き、2、7が突起状を呈している。渦巻文上部の口縁部との余白部分には、1が無文、4、5が沈線渦巻文、2、3、6、7が短沈線を施文する。明らかに1と4、5が裏と表の関係にあたり、1を正面とした場合に、右回りと左回りの3番目に渦巻文を施文する4と5が存在する。一見して単純な渦巻文の繰り返しの様であるが、単位数の7や正面と裏面の関係に対称性を崩す工夫が施されている。この土器は勝坂式終末平行の中峠式系の土器と考えられているが、地文に撚糸文を施文する点や、単位数、対称性の崩しに勝坂の要素を強く残しているものと判断される。

4、5は花園町台耕地遺跡（鈴木1983）第24号土壌出土土器である。5は無文の口縁部がやや長く外反し、球形状口縁部に横S字状の隆帯渦巻文を連結するモチーフを描いている。破片のため、全体構成は不明である。渦巻文の余白には、三叉文を施文する。この土器と伴出した4は、器形が類似し、球形状の口縁部に勝坂式的なモチーフを描いている。モチーフを分析すると、まず、2本対の縦位隆帶で口縁部をA区画とB区画の2単位に区画し、区画内にそれぞれが対応するように沈線と隆帯のモチーフを配置する。A区画には（沈線Y字状三叉文十横S字状隆帶文十刺突文を伴う沈線Y字状三叉文十沈線渦巻文）を施文し、B区画には（刺突文を伴う沈線I字状三叉文十横S字状隆帶文十沈線I字状三叉文）を施文する。A区とB区は非常に構成が類似するが、三叉文のYとIを置き換えており、A区にはさらに沈線渦巻文を追加施文して、対称性の崩しが強調されている。また、縦位区画隆帶を境に見ると、対称位置の沈線三叉文YとIが対峙し、刺突文付き三叉文のYとIが対峙するように仕組まれており、さらには渦巻文が加わって対称性が崩されている。胴部に繩文を施文することは、2と共通する。

この2個体を比較すると、4の横S字状隆帶文は

刻みを施すが1本隆帶で施文されるのに対し、5の連結横S字状渦巻文は2本隆帶で表現されている。4の1本隆帶は1のS字状隆帶文と共に、5の2本隆帶は2の背割れの横S字状隆帶文と共に通する要素と捉えられ、それぞれ同時期における表現方法のバリエーションと認識される。

6は伊奈町原遺跡第13号住居跡（村田1997）出土土器である。器形は5に類似し、口縁部に横S字状隆帶文を1~5の5単位に配置し、それを2本隆帶で連結する。隆帶上には、2列の結節沈線が背割れ隆帶状に施文されている。大木8a式的な色彩が強いが、単位数を5単位にする点で、勝坂式の対称性を崩す行為が看取される。

また、7は原遺跡と隣接する伊奈町北遺跡（金子1987）第50号住居跡出土土器である。球形状の口縁部に短く外反する口唇部を持つ点は1と類似し、撚糸文地文は3と類似する。口縁には横S字状隆帶文を1~3の3単位に配置し、それを連結しており台耕地遺跡5に近似する。そして、S字状隆帶文は2本の背割れ沈線による3本隆帶で施文されるが、それは2本隆帶で連結されている。2本隆帶の連結は5、6と同様である。連結部が長いため、この部分をS字状隆帶文に見立てることも可能で、5単位の連結文を考えることもできよう。

7は組成から加曾利E I式初頭段階に位置付けられるもので、6より若干新しく位置付けられるものである。しかし、6の背割れ2本結節沈線が沈線文化して7の3本隆帶となり、5単位の横S字状隆帶文が3単位に、場合によっては5単位の変化形態とも考えられるが、変遷することに非常に濃密な系統的関係性が看取されるのである。また、3もしくは5単位構成が明らかに勝坂式の構成原理であることはまま上遺跡の報告書で検討した通りであるが（金子2001）、7は大木8a式及び東部關東的な系統要素を持ちながらも勝坂式の構成原理が継承されており、多系統要素が糾合されて加曾利E I式初頭期の土器群が成立してきたことを具現化する好例と言えよう。

以上のように、勝坂式終末期における県内北西部と南東部の、主に大木8a式と勝坂式の混交する様相を比較してきたが、1本隆帯、2本隆帯、3本隆帯描出、単位文連結要素、連結手法、単位数などに地域的な様相が窺われると共に、勝坂式の構成原理が地域的な変容を受けながらも顕在化されていることが観察された。

中野遺跡の1は口縁部が6単位構成であるが、これは大きさは3単位の倍数と捉えることができ、勝坂式の原理が作用していると考えられる。また、口縁部文様帶と勝坂式的な頸部文様帶を別構成とする

ことでも、他に同様の事例があることから決して偶然の出来事ではなく、大木式的な要素及び構成に対してさえも、対称性を崩すという立場から勝坂式の主要な構成原理が働いた結果であると判断されるのである。

従って、中野遺跡の1は、7以外の他の土器群とほぼ同時期の加曾利E I式成立直前期に位置付けられるもので、大木8a式の大きな進出期における勝坂式の構成原理の変容を物語るものであり、来るべき加曾利E I式成立に向かっての準備が行われている土器として注目、評価される資料なのである。

2 晩期の住居跡と出土遺物について

中野遺跡からは、県内でも珍しい晩期初頭の住居跡が2軒検出された。この秩父地方においても晩期の住居跡検出例は非常に少なく、貴重な資料を追加したことになる。ここでは中野遺跡の住居跡の形態と、該期の遺跡が集中する大宮台地や他県の事例との比較の上、中野遺跡検出の住居跡及び出土土器の位相を検討してみたいと思う。なお、参考資料を第35図、第36図に示した。住居跡の大きさは120分の1、土器は8分の1に統一してある。

まず、中野遺跡の晩期初頭住居跡の特徴は、径4～5m前後の円形に近い楕円形か楕円形を呈し、円礫の石圍¹で、明瞭な壁溝や柱穴を持たない点にある。柱穴は大きな土壤状のものや、小さく浅いピットが想定されるが明瞭ではない。出土土器から晩期初頭の安行III a式終末期に比定されるる時期で、円形を基調とした住居形態であることが最大の特徴として捉えられよう。

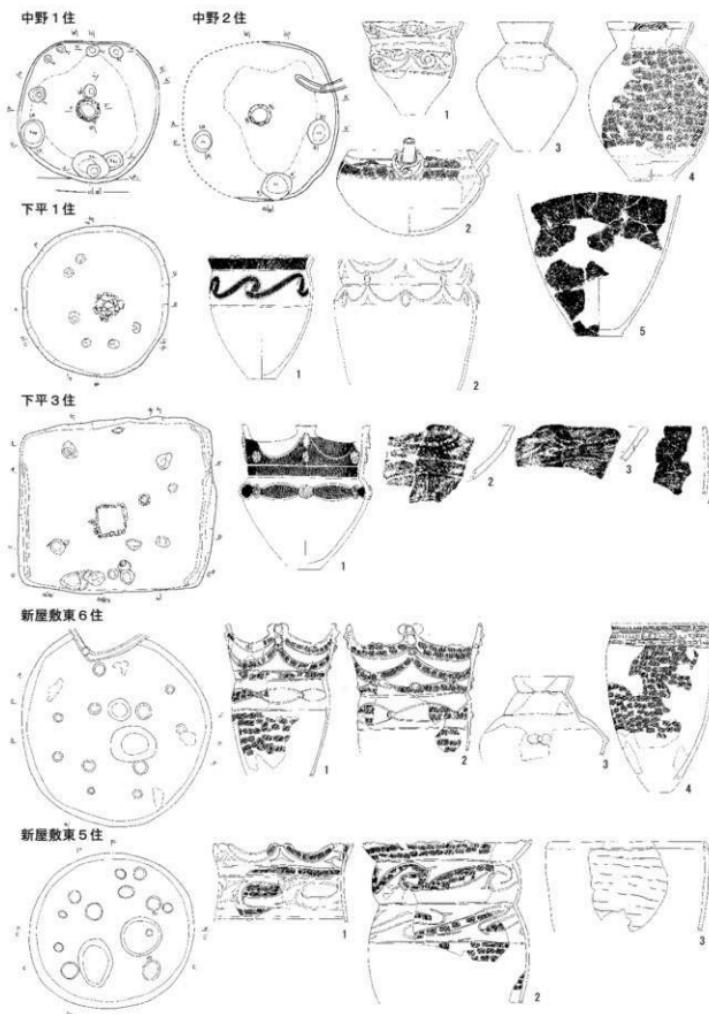
秩父地方で晩期の住居跡は、合角ダム水没地域関連の調査による下平遺跡（橋本1995）で検出されている。下平遺跡第1号住（第35図）は中野遺跡第2号住居跡とほぼ同様な規模の、径4m強の楕円形の住居跡で、板状角礫を楕円形に配列した石围¹を持つものである。やはり、柱穴は明瞭ではない。時期は安行III b式～III c式にかけての遺物が出土しており、

中野遺跡より若干新しい時期の所産である。

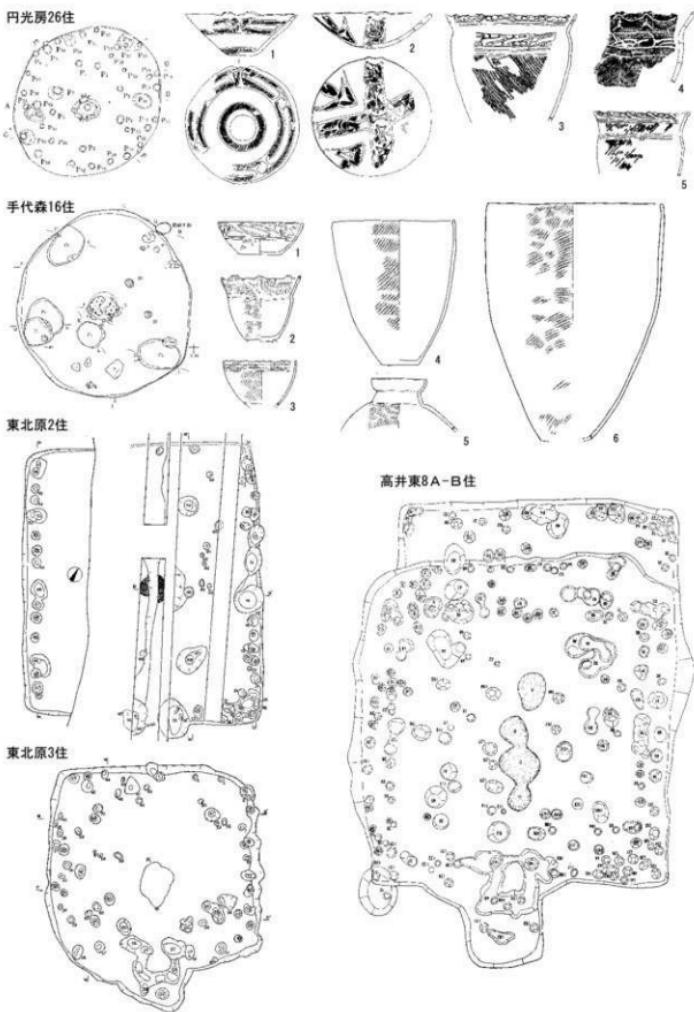
また、第3号住居跡は長径5.5mを測るほぼ方形を呈し、壁溝を持ち、4本柱を主柱とする構造である。炉は角礫を方形に並べた石围¹である。安行III b式期の所産と思われる。出土土器は、後期から続く安行系の波状口縁精製深鉢土器Ⅰが出土している。方形で4本主柱、入り口部の対ビットと思われるビットも確認されることから、大宮台地の晩期安行式期の住居跡と同系の住居形態と推定される。

これらの少ない例からではあるが、秩父地方では、円形の住居跡と、安行系の方形の住居跡がほぼ同時期に存在し、安行III c式期にも円形の住居跡が存在していることから、それぞれの住居形態には系統差が現れていることが想定される。

秩父地方から離れ、県内でも北部地域の深谷市新屋敷東遺跡（新屋1992）でも、晩期の住居跡が検出されている。新屋敷東遺跡第6号住居跡（第35図）は径5.5m前後の楕円形を呈し、浅い柱穴が円形状に並ぶ。その内4本を主柱と認識することもできる。炉は楕円形の地床炉¹である。また、第5号住居跡も径4.5m前後の円形を呈し、柱穴が円形に並ぶ。その内4本を、第6号住居跡と同様に主柱と認識することもできる。第6号住居跡からは、安行系の波状口縁深鉢土器（1、2）が、大洞B C式系の土器（4）



第35図 晩期の住居形態 (1)



第36図 晩期の住居形態 (2)

と共に出土している。従って、住居跡は下平第3号住居跡と同様に、安行Ⅲ b式期の所産と認定される。第5号住居跡からも、安行Ⅲ b式の瓢形土器（2）や、東北縫付土器系のモチーフを持つ深鉢土器（1）も出土している。

新屋敷東遺跡の住居跡が問題となるのは、出土土器が明らかな安行系の土器群で占められていることである。秩父地域の下平遺跡第3号住居跡は安行系の土器群で方形の住居跡であるが、新屋敷東遺跡の住居跡は安行系の土器群で円形の住居跡であるという点である。新屋敷遺跡の住居跡は4本柱の可能性があり、そうであるとすれば、安行系の方形住居構造と、円形の住居構造とが折衷しているのか、はたまた方形のプランを円形と誤認しているかのいずれかの可能性が考えられる。しかし、掘り込みが比較的深く、明瞭に検出される方形に遡る壁溝及び壁柱穴が検出されていないことから、円形もしくは楕円形プランを呈する蓋然性が高いものと判断される。土器の系統と住居の系統に整合性が見られないことになるが、それが実態であるのかは、現在では早急に解決する手立てではなく、今後の資料の増加を待つて判断して行かざるを得ないと考えている。

秩父地域が隣接する中部山間地域での様相を見ると、晩期初頭の竪穴住居の検出例は決して多くはない。著名な例としては、長野県戸倉町円光房遺跡（原田1990）、第26号住居跡（第36図）が挙げられる。第26号住居跡は長径4.4m前後の楕円形を呈し、炉は川原石を6角形状に配した石團炉で、全体的に掘り込みが殆ど確認されていないものである。多数のビットが円形状に存在するが、主柱穴は決め兼ねる。出土土器は大洞B C系の土器を伴う、在地の晩期前葉の土器群で、安行Ⅲ b式平行となろう。全般的に、中野遺跡第1・2号住居跡、下平遺跡第1号住居跡、新屋敷遺跡第5・6号住居跡と規模や形態が類似する。

また、東北地方の晩期の住居跡は多数検出されているが、やはり晩期初頭の例は少ないと言えようか。晩期前葉の大洞B C式段階では良好な例が多く枚挙

に達が無いが、竪穴住居の形態は殆ど円形を基本にしたもので、主柱穴の不明瞭なものが多い。

代表的なものとして、中野遺跡第2号住居跡とはほぼ同様な規模で、楕円形を呈し、柱穴とも土壇の重複とも判断しきれないビットが伴う岩手県柴郡津南村手代森遺跡（佐々木1986）第16号住居跡（第36図）を挙げた。大洞B C式に比定される土器群が出土しておらず、1の浅鉢は口縁部に玉抱きに近い足の長い三叉文を、細長く斜位に施す。この構成は、中野遺跡第2号住居跡出土の1の口縁部のモチーフを彷彿させる。

以上、大洞系の竪穴住居は円形を基本としていることが理解される。しかし、近年、晩期の平地式や掘立柱建物の存在が確認され、住居形態も一様ではないことが明らかにされている。そのような中で、竪穴住居の系列として、円形と方形があり、関東地方の方形は安行系の住居形態であることは明らかであろう。

第36図下段には、大宮台地における代表的な晩期の竪穴住居を示した。大宮台地においても晩期初頭の良好な住居跡例は少なく、前葉からは良好な住居跡が多くなる。

東北原遺跡（山形1985）第2号住居跡は中央部に擾乱を受けるが、長径7.4mの方形を呈し、入り口部の対ビットと壁柱穴が遡るものである。4本柱を主柱とするものと思われる。著名な動物型土製品（亀型土製品）が出土した住居跡で、安行Ⅲ a式～Ⅲ b式にかけての所産と思われる。同じく第3号住居跡も方形で入り口施設を持ち、4本主柱の構造であるが、長径6m弱の比較的小さな住居跡である。

また、高井東遺跡（田部井他1974）第8A・B号住居跡は晩期の大型住居跡である。2軒が重複し、さらに8A号住居跡は2～3回の建て替えが行われている。第8A号住居跡は長径9.2m、短径8.9mを測り、安行Ⅲ a式土器が主体的に出土している。晩期安行式期の住居跡は、重複もしくは建て替えが行われている場合が殆どで、継続性が取扱われる。特に、大

型になる住居跡では顕著と言えよう。

このような円形と方形の住居形態の相違は、何に起因しているのであろうか。安行系の方形の住居跡は入り口施設を持ち、4本主柱で、壁柱穴を廻らせる構造で、後期安行I式以降晩期中葉の安行IIIc式まで継続されている。また、円形の竪穴住居形態も、地域を変えて安行IIIc式まで継承されている。両者に系統差があることは明らかである。

ここであえて両者の相違を指摘すると、住居の上屋構造の相違を挙げることができよう。安行系の方形住居跡は4本主柱が太くしっかりしているものが多く、壁柱が廻ることから、屋根を葺き下ろさない壁立ち構造の家が想定される。切妻になるか入母屋になるかは判断しきれないが、壁立ちの方形住居は平地式もしくは掘立柱式（高床式）とも共通する要素を持つ。

一方、円形で主柱穴の不揃いな住居は、入母屋の葺き下ろしの構造が想定される。それは、東北地方を中心とする寒い地域で、雪国の住居形態を想定させられる。季節による住み分け形態であるかは別としても、山間部や比較的寒い地域での住居形態なのではなかろうか。

埼玉県の秩父地方や県北地方で、円形と方形の両者が混交する様相は、先にも述べたが、環境による形態の選択差ではなく、土器及び住居の系統差が何らかの形で現れているものと解釈される。早急に結論の出せる問題ではないが、情報の系統差という点から、今後検討を続けて行きたいと考えている。

さらに、注意しておきたいのは、今回の調査事例でも明らかであったが、柱穴とも土壤とも判断が難しいピットが住居内に存在することである。柱穴ならば問題はないが、他の土壤との重複であるとすれば、単なる土壤ではなく住居内墓壙の可能性がある点を指摘して置きたい。中野遺跡第1号住居跡のピット9からは漆製品が3点出土しており、蓋の板状石で覆われていたことから、墓壙としての性格も否定しきれない。廻絶した住居内に墓壙を設ける行

為は、およそ前期の後半段階からみられ、中期に於いては廻絶として特殊化するが、晩期にまで継承されるものであるとすれば、縄文時代の墓制にたな視点を提示するものとなろう。加曾利B式以降に墓域が確立化する動きの中で、廻絶的な風習が継承されるのであれば、具体例を示せず、論は飛躍するが、同一墓域内に多数の壺棺を追葬する弥生時代の再葬墓風習へのつながりの糸口が見出せるからである。今後の課題として置きたい。

最後に、遺物について若干検討をしておきたい。中野遺跡からは波状口縁深鉢土器等の明瞭な安行式土器が出土しておらず、また、大洞系の土器も検出されていない。どちらかと言えば、中部、南東北地方的な土器群の様相の中に、安行式の影響が現れてい在地的な土器群と認識されよう。

第2号住居跡出土の第35図1は口縁部と胴部に文様帯を持つ鉢状の土器であり、横連結する玉抱き三爻文は安行IIIb式や大洞BC式段階の三爻文に近い感じを受ける。まだ、明瞭に玉を抱いていることから安行IIIa式段階に比定されるものと思われるが、その終末か、もしくはIIIb式初頭段階にまでずれ込む可能性もある。2の瓢形土器は、新屋敷東遺跡第6号住居跡出土第35図3や東北原遺跡出土の安行IIIb式段階の例と酷似し、注口土器の可能性がある。

また、中野遺跡第2号住居跡2の注口土器は、胴部文様が平行沈線に繩文を施す単純な構成であり、安行IIIa式に見出し難い要素である。覆土出土の破片の中にも平行沈線と繩文のみの破片が特徴的に含まれており、中野遺跡における一つの特徴と捉えることができよう。この平行沈線を多用する土器群は、花園町橋屋遺跡（高村1994）でも、共伴関係は明確にできないが、大洞BC式系土器と共に出土している。この平行沈線を多用する要素は、中部高地の晩期初頭の佐野式Ia、Ib式にも見られる特徴であり、これらの影響と、安行IIIa式とが折衷して、中野遺跡の土器群が成立したであろうことを指摘しておきたい。秩父地方の地域性を考慮すると、

佐野I式の影響を考えざるを得ないであろう。

さらに、4の壺形土器や、5の深鉢土器は、その形態、羽状縞文の存在等から南東北の系統を考えるのが妥当であろう。

石器では、縄泥片岩製の石劍、石棒の未製品が多数検出されている。これらがそのまま機能していたかは判断されないが、製作途中品である可能性が高い。製作址としての可能性もあるが、今回の調査ではそこまで言及し得る資料は出土していない。

また、第2号住居跡の床面から翡翠の玉が出土している。酷似するものが蓮田市ささら遺跡（橋本1985）から出土している。大きさも、穿孔方法も類似するもので、関連性が窺われる。なお、石質の分析結果は巻末に示した通りである。

以上、今回の中野遺跡発掘調査は面積が狭かったものの、得られた成果は非常に貴重であったことが総括される。

<参考文献>

- 新居雅明1992「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 小澤 守1991「秩父・上長瀬古墳群90」長瀬町上長瀬古墳群発掘調査会
- 小澤 守1999「秩父・辻遺跡97-1町内遺跡発掘調査報告書1-」長瀬町教育委員会
- 小澤 守2000「秩父・袋遺跡96-1 秩父・辻遺跡97-1町内遺跡発掘調査報告書2-」長瀬町教育委員会
- 小澤 守2001「秩父・鹿田遺跡1996-1町内遺跡発掘調査報告書3-」長瀬町教育委員会
- 小澤 守2003「秩父・六道遺跡1996-1町内遺跡発掘調査報告書4-」長瀬町教育委員会
- 小澤 守2004「秩父・大溝遺跡2000-1町内遺跡発掘調査報告書5-」長瀬町教育委員会
- 金子直行1987「北・八幡谷・相野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集
- 金子直行2000「堀東・城西Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第257集
- 金子直行2001「まま上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集
- 佐々木清文1986「手代森遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集
- 鈴木敏昭1983「台耕地（I）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 高村敏則1994「橋屋遺跡」花園町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 田部井 功1974「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第25集
- 中島 宏1982「中郷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集
- 橋本勉1985「ささら（II）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集
- 橋本康司1995「下平遺跡」「秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書」小鹿野町教育委員会
- 原田政信1990「円光房遺跡」戸倉町教育委員会
- 村田章人1997「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 山形洋一1985「東北原遺跡発掘調査報告-第6次調査-」大宮市文化財調査報告第19集

付編 中野遺跡出土石製小玉の石材分析

はじめに

中野遺跡2号住居跡床面から検出した石製品（第11図39）について、主要鉱物の分析を実施した。

遺物の特徴

分析対象とした遺物は径8mmで片側からの穿孔が認められ、やや透明感のある緑色～灰白色を呈していた。質量は0.78gであった。

分析諸元

理化学的な分析は、主要鉱物の組成を得るためにX線回折分析法を実施した。

X線回折分析法の諸元は表-1のとおりである。非破壊分析の必要性から平行ビーム法で測定を行っているために、ややピーク幅が広がっている。また粉末法ではないために、回折結果は岩石試料固有の結晶の配向性に影響され、主要な回折線の強度比は、データベースに掲載されたものとは異なっているが、経験的に同定結果に重大な影響はない。

表-1 X線回折分析法の諸元

ターゲット: Cu	モノクロ受光スリット: なし
管電圧: 40kV	走査モード: 連続
管電流: 40mA	サンプリング幅: 0.01°
カウント/カムペー: 固定	走査範囲: 3°~90°
カウンタ: シンチレーションカウンタ	積算回数: 1回
発散スリット: 0.5 mm	スキャニスピード: 2°/min
発散限界幅: 10mm	走査軸 2θ/θ: 0°
散乱スリット: 解放	θオフセット: なし
受光スリット: 解放	光学系: 平行ビーム法

分析結果

X線回折分析法の結果は、図-1にプロファイルで示した。JADE6.0を利用し、ICDD-PDF DataSets-51 Plus70-80Release2001のデータで同定を試みた結果、試料の主成分はjadite(翡翠輝石)であると考えられた。

県内出土の石製品で同様の形態を示し、成分としてjaditeの存在が理化学的に確定できた例としては、さら遺跡出土例(埼玉文報告書47集185図3)をあげる事ができる。

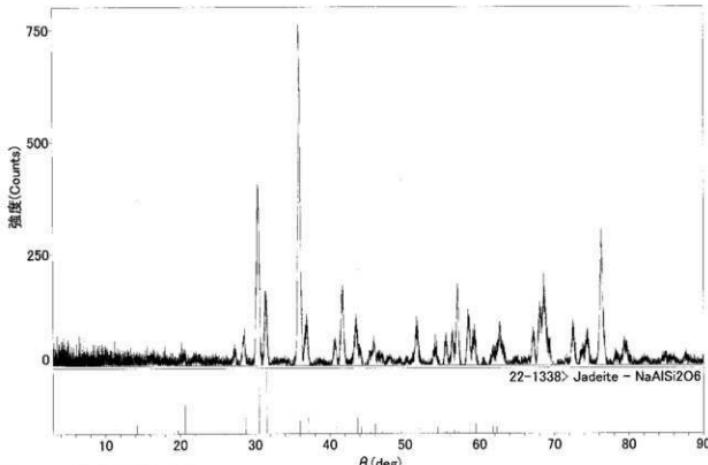


図-1 X線回折分析法の結果